

Title	MinCコンサート：双方向コミュニケーションのあるクラシックコンサートの仕組み
Sub Title	MinC concert : classical music concert with two-way communication
Author	小島, 千代美(Kojima, Chiyomi) 奥出, 直人(Okude, Naohito)
Publisher	慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科
Publication year	2018
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2018年度メディアデザイン学 第639号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40001001-00002018-0639

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修士論文 2018 年度（平成 30 年度）

MinC コンサート
～ 双方向コミュニケーションのある
クラシックコンサートの仕組み～

慶應義塾大学大学院
メディアデザイン研究科

小島 千代美

本論文は慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科に
修士(メディアデザイン学) 授与の要件として提出した修士論文である。

小島 千代美

審査委員：

奥出 直人 教授 (主査)

大川 恵子 教授 (副査)

石戸 奈々子 教授 (副査)

修士論文 2018 年度（平成 30 年度）

MinC コンサート
～ 双方向コミュニケーションのある
クラシックコンサートの仕組み～

カテゴリー：アクションリサーチ

論文要旨

本論文では、初級者でも楽しめる、観客・演奏家の双方向コミュニケーションのあるクラシックコンサート・サービスを提唱する。クラシック音楽と聞いて、敷居が高いというイメージを持っている初級者は多いが、実はクラシック音楽はCM、映画で使われたり、レストランで流れていたり、意外と身近に存在している。つまり、彼らはクラシック音楽そのものというより、近代のクラシック音楽産業が成立していく中で確立した、一方的に拝聴する「クラシックコンサート」の形式を敬遠しているのではないか。本研究では、双方向コミュニケーションのあるクラシックコンサート、「MinC コンサート（ミンク・コンサート）」を実施し、初級者の観客に対してその有効性をバリデーションするプロセスを記録、これからのクラシックコンサートのあり方のヒントとしたい。

キーワード：

クラシック音楽, クラシックコンサート, 初級者, 双方向コミュニケーション

慶應義塾大学大学院 メディアデザイン研究科

小島 千代美

Abstract of Master's Thesis of Academic Year 2018

MinC Concert - Classical Music Concert with Two-Way Communication

Category: Action Research

Summary

In this thesis, we propose a classical concert service with two-way communication between audience and performers that even beginners can enjoy. Although beginners tend to be intimidated by a classical music concert, they can find classical music everywhere in their lives such as in CM, movies, background music in restaurants, etc. They just might have felt intimidated by the format of classical music concerts where they have to listen obediently, which had been established by the classical music industry. In this research, we conducted the experimental concerts by using the prototype of "MinC concert", a classical music concert with two-way communication, and recorded the process of validating its effectiveness for beginners. The results would give us some hints to a new approach to a classical concert for beginners in future.

Keywords:

Classical Music, Classical Music Concert, Beginners, Two-way Communication

Graduate School of Media Design, Keio University

Chiyomi Kojima

目 次

第1章 序論	1
第2章 先行研究レビュー	5
2.1. 鑑賞スキルの向上に関する研究	5
2.2. サービス消費とパーソン消費に関する研究	6
第3章 アクションリサーチ計画	8
3.1. 研究アプローチ	8
3.1.1 調査目的	8
3.1.2 調査項目	9
3.1.3 調査対象：観客	9
3.1.4 調査時期と規模	9
3.1.5 調査方法	9
3.2. 双方向コミュニケーションのある MinC コンサートのデザイン	10
3.2.1 民族誌調査によるターゲットペルソナの作成	10
3.2.2 メイキングストーリー	14
3.2.3 ユースケースとコンセプト	19
3.2.4 コンサートの仕組み（プロトタイプ）作成	20
3.2.5 MinC コンサートの命名とロゴ	22
3.3. アクションリサーチとしての MinC コンサートの実施計画	23
3.3.1 観客へのプロポーザルと協力依頼	24
3.3.2 演奏家へのプロポーザルと協力依頼	24

第4章 実験的コンサートによるバリデーション	28
4.1. MinC コンサート Vol 1 の実施	28
4.1.1 実験コンサートの詳細	28
4.1.2 プログラム進行の様子の記述	29
4.1.3 アンケート結果について	36
4.1.4 まとめ	36
4.2. MinC コンサート Vol 2 実施	38
4.2.1 実験コンサートの詳細	38
4.2.2 プログラム進行の様子の記述	38
4.2.3 アンケート結果について	44
4.2.4 まとめ	45
4.3. MinC コンサート Vol 3 の実施	46
4.3.1 実験コンサートの詳細	46
4.3.2 プログラム進行の様子の記述	46
4.3.3 交流タイム	53
4.3.4 アンケート結果について	54
4.3.5 まとめ	54
第5章 結論	57
5.1. リサーチの成果要約	57
5.2. 展望・課題	60
参考文献	61
謝辞	63
付録	64
A. ステークホルダーへの提案書	64
B. アンケート結果	65

目 次

3.1	エノテカ高輪店	11
3.2	ワインエキスパートの東野さん	13
3.3	P e r s o n a : 観客 そろそろ大人になりたい若者	14
3.4	P e r s o n a : 人間として成長したい若手経営者	15
3.5	P e r s o n a : 時間を有意義に過ごしたい退職者	16
3.6	アイディエーション・スキットの様子	17
3.7	初級者がクラシックコンサートを楽しむユースケース	19
3.8	コンセプト	20
3.9	ミンクを使ったロゴ	23
3.10	MinC コンサートのポスター 見本	23
3.11	募集要項 見本	25
4.1	コンサート会場見取り図	29
4.2	コンサート開始時の観客の様子	31
4.3	クイズで盛り上がる観客	32
4.4	コンサートに取り入れられた仕組み Vol 1	37
4.5	コンサート会場見取り図	38
4.6	オープニングの観客の様子	39
4.7	クイズで手を上げる観客の様子	42
4.8	質問する観客の様子	44
4.9	コンサートに取り入れられた仕組み Vol 2	46
4.10	コンサート会場見取り図	47
4.11	オープニングの様子	48

4.12	クイズで手を上げる観客の様子	50
4.13	ヴァイオリンの弓に興味を持ち身を乗り出す観客の様子	51
4.14	コンサートに取り入れられた仕組み Vol 3	55
A.1	ステーキホルダーへの提案書 1 / 3	64
A.2	ステーキホルダーへの提案書 2 / 3	65
A.3	ステーキホルダーへの提案書 3 / 3	65
B.1	アンケート結果 Vol 1 1 / 2	66
B.2	アンケート結果 Vol 1 2 / 2	66
B.3	アンケート結果 Vol 2 1 / 3	67
B.4	アンケート結果 Vol 2 2 / 3	67
B.5	アンケート結果 Vol 2 3 / 3	68
B.6	アンケート結果 Vol 3 1 / 3	68
B.7	アンケート結果 Vol 3 2 / 3	69
B.8	アンケート結果 Vol 3 3 / 3	69

第1章 序

論

本論文では、従来の「拝聴する」という一方向的なクラシックコンサートではなく、双方向のコミュニケーションのある参加型コンサートの提唱を試みたい。というのも、私の周りには、私も含め、クラシックコンサートについて敷居が高いという人が多勢いる。同年代の友人や、息子の年代の友人などである。彼らはコンサートに行かないかという、ポップやロックのコンサートには行っている。私の年代でも、昔のアイドルのポップコンサートや、今はおじいちゃんとなったロックスターのコンサートには喜んで行くのだ。行く前からわくわくし、行ってみて、やっぱり来て良かったとなる。会場の熱気や、アイドルが自分を見てくれたような錯覚も含め、自分もコンサートの一部になっている感じがするのである。

一方でクラシックコンサートといえば、静まり返った会場で演奏家の奏でる音を拝聴するイメージである。こういった形式は19世紀の近代ヨーロッパで確立されていたとされ [1]、今日までのクラシックコンサートに受け継がれている。文学者であり、自らピアニストであったエドワード・サイードによれば、クラシックコンサートは、義務的な沈黙によって守られた演奏家たちが専門化された特殊な技能を披露し、観客に対して従順な受容と忍耐力を強制する場である [2]。ストレートな言い方に驚くが、これがクラシック音楽と聞いて敷居が高いと思っている人たちを多く生み出している原因であろう。

音楽学者である岡田によると、クラシックは、もともと宮廷音楽として、お抱え音楽家だったバッハやモーツァルトが王侯貴族をエンターテインするための音楽が出発点であった。19世紀半ばの中産階級層の台頭により、音楽というエンターテインメントに対する需要が大きくなった。一度に大勢の人が楽しむことのできる形式、現在のコンサート形式が形作られ、クラシック音楽を楽しむ層が広

がっていったのである。同時に、演奏家という独立した職業が生まれてくるのもこのころである。バッハ、モーツァルトのように、作曲家兼演奏家というのではなく、演奏を専門に行う職業が誕生した [3]。こうして、ヴィルトゥオーソと呼ばれる超絶技巧を持つ演奏家が人気を集め、有名演奏家のコンサートには巨額の金動くようになった。お金のある所に人・モノは集まる。こうして、音楽産業は勃興し、多額の金とれるコンサートを作り出し、付随するCD、ビデオ販売など、一大音楽ビジネスとして展開していった。その中で、金とれる演奏家は一握りとなっていき、専門家となった演奏家と観客の区分が鮮明になった。音楽学者の渡辺裕は、聴衆の変化を分析し、近代になり音楽作品に対して精神性をもって対峙する「構造的聴取」といわれる「真面目な聴衆」が誕生したと述べている [1]。

このように、演奏家からの一方的な演奏を拝聴する形のコンサートになってから、聴衆というのはクラシック音楽の情報・知識をある程度自分で獲得していくことが暗黙のうちに要求されるようになっていった。たとえば、初級者がクラシックコンサートへ行こうと、ネットで調べたとする。そこで出てくるサイトには、クラシックを聞くための心得、エチケット、忌避集など、何やら怖いものばかりで、初級者を一層威圧するばかりである。

しかし、周りを見回してみれば、クラシック音楽はコマーシャル、映画で使われたり、レストランで流れていたり、意外と身近に存在していることに気づくはずだ。つまり、敷居が高いというのは、クラシック音楽そのものというより、従来の「クラシックコンサートの形式」を敬遠しているのではないだろうか。

近代、クラシック音楽が一大ビジネスとなり、クラシック音楽産業が成立していく過程で、受動的な聴衆が誕生した [1]。そして、CD やビデオを売るためのコンサートが増え、音楽産業は経済的に潤っていった。しかしその間、観客の存在は少しずつ忘れ去られていったのである。今や、インターネットの時代となり、CD・ビデオが売れなくなっている。ポップスやロックなどがライブコンサートに回帰している中、クラシックもコンサートの在り方を多角化するとか、新規顧客獲得に力を注ぐ必要がさげばれている。[4]

そういった状況の中で、クラシック音楽に新しいファンを呼び込むために、初

級者への壁を低くするという試みが行われている。無料コンサートや、クラシックコンサートでのポピュラー音楽演奏、レクチャー付、指揮者のプレトークや飲食をしながら楽しむコンサートなど、初級者にクラシック音楽への興味や親しみを与える効果は大きいと思われる。しかし、これらも演奏家から観客への一方的なコミュニケーションが中心であり、演奏会中に観客からのコミュニケーションは拍手以外期待されていないように見える。

自分の経験からも言えることだが、初級者は情報・経験不足ゆえに、コンサート会場へ行って緊張する。一方的に音楽を押し付けられると、パッションもそれほどないため、受け身のまま聴く。そして退屈な印象を持って帰宅する羽目になるのは想像に難くない。そこで、双方向コミュニケーションを起こすことで、観客を巻き込むクラシックコンサートがあれば、もっとクラシック音楽を楽しめるのではないかと考えた。

コンサートの主なアクターは初級者の観客、演奏家、そしてその双方向コミュニケーションによって生み出される場の雰囲気である。クラシックコンサートを気軽に楽しみたい観客と、演奏機会と観客とのインターフェイスを求める演奏家に協力を要請し、実際のコンサートを開催する。演奏家には、観客がコンサートを楽しめるよう、曲の解説をしてもらい、必要な情報を与えてもらった。また、クイズ、質問コーナーなどで、観客・演奏家の双方向コミュニケーションを作り出し、観客はコンサートにどのように参加するか、どんなことに満足するのか、あるいはしないのかを観察、記録を試みた。

観客と演奏家の双方向コミュニケーションにより、観客がコンサートに参加し楽しむことができれば、初級者にとって、クラシックコンサートを楽しむための入り口となり、クラシックファンのすそ野が広がる可能性は大きい。演奏家としての在り方を含め、今後の初級者へのアプローチの仕方の大きなヒントになるであろう。

本論文の構成は5章よりなる。本章に続く第2章・先行研究では、観客はどのようにコンサートを楽しむかの観点から、鑑賞スキルの向上とパーソン消費によるサービス消費をとりあげる。第3章では、研究アプローチ、双方向コミュニケーションのあるクラシックコンサートのコンセプトデザイン、実験コンサートの実

施計画を含む、アクションリサーチプランを説明する。続いて、第4章では、実験的コンサートの実施により MinC コンサートの仕組みの有効性をバリデートし、解釈学的に記録をする。第5章では、バリデーションの結果を踏まえた結論と将来の展望を述べる。

第2章

先行研究レビュー

2.1. 鑑賞スキルの向上に関する研究

クラシック音楽が好きになる一方法として、鑑賞スキルの向上が考えられる。音楽の分野ではないが、芸術である美術鑑賞のスキルを上達するための研究がなされている。美術鑑賞においては、あいまいな感覚を言語化し、意見を表明することであいまいな感覚が明確になり、より理解が深まるとされている。[5]。

また、Koroscik は、素人 (Novis) と通 (Expert) の違いを踏まえ、素人である生徒を教える立場の教師に対して、生徒が知識レベルを拡大 (Expansion) し、今ある知識を他に応用 (Transfer) できるようにすることの重要性を説いている。そして、言葉によるヒントが、美術をより深く理解するために有効であることを主張している [6]。美術鑑賞の研究者であるハウゼンも、教師からの問いかけで初級レベルの生徒の積極性が高まり、作品に対する自分の意見や感想を言葉にしたり、人の意見や感想を聞くことで鑑賞技術が高まるとしている [7]。

このように、美術鑑賞においては、教師が初級者である生徒の鑑賞技術を高めるための手法が多く研究されている。いずれも自分の意見や感想の言語化を試みたり、人とコミュニケーションすることで鑑賞技術が高まることが確認されている。その際、言葉によるヒントが重要な役割を果たすことも明らかになっている。この枠組みは、美術鑑賞だけではなく、クラシック音楽鑑賞など、他の芸術鑑賞技術の向上にも役立つのではないかとと思われる。

2.2. サービス消費とパーソン消費に関する研究

初級者、つまり新規顧客を呼び込むための方策は何か。マーケティングの分野である消費者行動研究においては、消費者がマーケティングの刺激を受けて購買に至る心的プロセスの解明が中心に行われた。また、多くの消費者行動研究は日用品であれ、ぜいたく品であれ、物財（ブランドやプロダクト）を扱ってきた。和田は、購買ではなくなぜ消費するのかに焦点を当て、財のカテゴリーと消費形態の関係を明らかにすべきだと主張している。[8]

音楽を消費体験ととらえ、消費者行動について研究したものに Hirschman と Holbrook によるエステティックス（Aesthetic）消費の考え方がある。[9] アートに対するマーケティングアプローチとして、快楽消費の考え方を導入し、消費者の体験を、複合的な感覚様式（Multisensory）、ファンタジーや感情の観点から説明を試みた。また、Lacher と Mizerski は音楽消費体験モデルを構築し、快楽的消費がどのように購買に結び付くかを検証した。[10]

しかしながらこれらの試みは、音そのものの刺激に対する消費者の反応を消費者行動として体系化したものであり、コンサートの運営方法は考慮されていない。

一方和田は、音楽コンサート、演劇ライブなどのアート財は、CD や印刷物などの工業製品化された作品を含まないと定義することで、ディズニーランドなどのサービス財と同じであるとする。それは、顧客が同一時、同空間を共有することで成り立つサービスであり、消費者がパーソン消費を行なうとした。このパーソン消費は宝塚歌劇や歌舞伎などで顕著であるし、美容院や旅行代理店など、ワン・トゥ・ワンの対応が必要とされる場面でも重要になってくるとしている。そして、サービス財の消費において、顧客とそれに対応するサービス・スタッフによる双方向的なコミュニケーションによる関係性作りの必要性を説いている。[8]

クラシックコンサートがサービスであると考え、観客は演奏家のパーソン消費を通してコンサートというサービスを消費しているといえる。現在の演奏家と聴衆の一方的な関わり合いにおいては、よほど有名な演奏家でない限り、このパーソン消費を促すことは難しい。観客と演奏家の関係を双方向コミュニケーションに変えることで、観客が演奏家をパーソン消費できるようにする方法は、クラシックコンサートの一つの在り方として有効ではないか。MinC コンサートとい

うプロトタイプを使った実験を行い、このアプローチの有効性を確認する。

次章では、双方向コミュニケーションのあるコンサートの有効性を確認するためのアクションリサーチ計画を述べる。

第3章

アクションリサーチ計画

本章では、双方向コミュニケーションのあるクラシックコンサートの有効性をバリデートし、コンサート形式として提唱するためのアクションリサーチ計画を詳細に述べる。[11]

3.1. 研究アプローチ

この研究において、どのような仕組みがあれば双方向コミュニケーションが起きるのかは非常に重要な要素である。また、今までこのような経験があまりない演奏家にとっては、ガイダンスも必要になる。従って、まずはコンサートの仕組みをデザイン思考の手法を使いデザインした。演奏家によってパーソナリティ、経験値、価値観が違うため、その仕組みを演奏家に提供し、それぞれの方法で実際のコンサートに取り入れてもらう実験を行う。実験的なクラシックコンサートは、観客、演奏家、場所を変え3回開催し、その様子をビデオで撮影する。ビデオ録画を観察、仕組みの有効性をバリデートし、我々の目指す初級者向けのクラシックコンサートの仕組み提唱につなげたい。

3.1.1 調査目的

双方向コミュニケーションのあるクラシックコンサートの有効性を調査し、初級者が気軽に行けるクラシックコンサートの仕組みを提唱する

3.1.2 調査項目

- 知識なくコンサートを楽しむことができたか
- 観客と演奏家の双方向コミュニケーションが認められるか
- コンサート中の双方向コミュニケーションは観客にどのように作用するか

3.1.3 調査対象：観客

- 年齢、性別、職業は問わない
- 主に、クラシック音楽に興味のある初級者（過去12か月に0-2回程度のコンサート経験）
- コンサート料金を1000円～1500円に設定することで、まったくクラシック音楽に興味のない人たちを対象から外す。

3.1.4 調査時期と規模

実験コンサートに来場した観客に対して実施する。5月下旬から6月初旬までの間に3回行い、1回の観客数は少なくとも15人以上とする。

3.1.5 調査方法

- 双方向コミュニケーションのあるクラシックコンサートをデザインする
- 主旨に賛同してくれる演奏家を探す
- 主旨に賛同してくれる観客を募集する
- 実験的演奏会を実施する
- 観客および演奏家の許可を得てビデオ撮影を行い、観察によって有効性をバリデートする

3.2. 双方向コミュニケーションのある MinC コンサートのデザイン

デザイン思考の手法を使い、民族誌調査、観客のペルソナ作成、スキットなどにより、観客が参加して楽しめる双方向コミュニケーションのあるコンサートをデザインした。

3.2.1 民族誌調査によるターゲットペルソナの作成

ワインテイ스팅における初級者

2017年10月14日、エノテカ高輪店にてワインテイ스팅の民族誌調査を行った。フィールドマスターはワインに興味をもつ学生の杉本将太さんである。エノテカ高輪店、ワインエキスパートの東野朱里さんの協力を得て執り行われた。通常のワインテイ스팅は月一回定期的に開かれており、プライベートなものも行われていないが、今回、学生にワインのことを説明したいと伝えたところ、ワイン好きが増えるのは好ましいと言って、快く引き受けてくれた。杉本さんはKMD M2の学生で、GIDから帰ってきて卒業後の就職も決まり、あとは修士論文を書くばかりとなっている。実はお酒は苦手なのだが、ワインには興味があり、ワインのことを知っているとちょっとカッコイイと思っている若者である。当日18:30にJR品川駅前のエノテカで落ち合うことになった。

自分の気持ちを表現する言葉を知らない初級者 東野さんは白ワインと赤ワインを2銘柄ずつ、30mlを試飲用グラスに注いで説明をしてくれた。まずは白ワインから。銘柄の違う白ワインを2本奥のカウンターから持ってきて、グラスに注ぐ。杉本さんが一口飲んで「これはいける」という顔をすると、黙って見守っている。杉本さんは、2つ目のグラスのワインではちょっと首をかしげる。再確認のため、もう一度最初のワインを飲んでみて、「最初の方が好きだな」と言った。東野さんがすかさず1本目のワインボトルのエチケットを見せると、再度2つ目のグラスからワインを飲み、「やっぱり最初のだな」と自信なさそうにつぶやい



図 3.1: エノテカ高輪店

た。「どちらが好きですか？」と東野さんに聞かれ、杉本さんは「よく分からないけどこっちの方かな」と答えた。そこで、東野さんが「2本目は辛口だから初心者には向かないかもしれない」というと、「辛口ってどういうこと？」という質問が飛ぶ。発酵プロセスの違いで甘口、辛口ができるとの説明を聞くと、杉本さんは、2本目は辛口だから口に合わなかったのだと妙に納得していた。これは、ワインの初級者は、情報が少なくおいしいという基準がないので、判断するのが難しい。味わっても、どのような言葉で表現すればよいかわからないケースが多いと解釈した。

わからない、知らないことにはイメージが湧かず、とりあえず注文する初級者 東野さんは、出勤してくると飲食スペース担当のスタッフと話し、売り場と担当を交代して、対処してくれた。私たち全員が揃うと、まずメニューを渡し、食べ物の注文を取る。杉本さんは自分の知らないメニューを見つけた。イチジクの白ワイン煮と赤ワイン煮だ。これってどんな味がするんですか？と素直に東野さんに聞いている。東野さんがイチジクを少し甘く煮てあり、赤ワイン煮の方がちょっとこってりしていますよと丁寧に答えてくれる。でも、杉本さんにはイメージがわからないようだ。だいたいイチジクってどんな果物なのかがわからない。そして果物をワインで煮るとはということなのかが疑問なのだ。最終的に、「こって

り」に惹かれ赤ワイン煮を頼む決断をした。同席者二人に赤ワイン煮で良いかどうかを確認すると、人差し指を立て、東野さんに一皿注文をした。初級者にとって、自分の知識のデータベースにないことは、想像するのでさえ難しい。しかし興味があれば、とりあえず頼む決断をするものだと感じた。

次々と質問を繰り返して、エキスパートに親しみを感じる初級者 杉本さんは、ワインのことを本当に知らないらしく、「エチケット」とか、「Old World と New World」

とか、東野さんの説明にすべて「それなんですか?」と質問している。東野さんも一つ一つ丁寧に答えてくれ、杉本さんはフンフンうなずいたり、妙に感心したりしていた。杉本さんの頭の中では、次々と疑問が湧いてくるらしい。東野さんは「そんな質問?」という表情も見せず、一生懸命わかり易く答えようとしている。ワインに愛情があり、他の人にも知ってほしいのだ。杉本さんも、自分の質問にすべて答えてくれる東野さんに親しみを感じ、益々気軽に質問をする。初級者は、ほとんど知識がないので、あれこれ質問し、答えてもらえると嬉しい。また、丁寧に答えてくれる人に親しみを感じ、ますます質問するものだと解釈した。

杉本さんのゴール

- 自分の味覚にあったワインが何なのか知り、料理に合わせ、料理をよりおいしく食べたい。
- ワインのことを知り、デートでちょっとかっこつけたい。

杉本さんのメンタルモデル 見ると：近づく、目に留める、質問する、手に取る、飲む、発音する、気になる

聞くと： 見る、迷う、思い描く、答える、なでる、メモをする、質問する、聞き返す、思い出す、覚える、頷く、感心する、納得する感動する、驚く

嗅ぐと： 飲む、楽しむ

味わうと：述べる、首をかしげる、笑う、口をゆがめる



図 3.2: ワインエキスパートの東野さん

ターゲットペルソナの作成

以上のフィールドワークより、別々のゴールを持つ3人のクラシック初級者のターゲットペルソナを作成した。(図 3.3 を参照)(図 3.4 を参照)(図 3.5 を参照)

クラシック初級者 初級者はクラシック音楽に興味を持っており、クラシック音楽コンサートはまだ行ったことがないが、クラシックを知っているとカッコイイと思っている。クラシック音楽のことがわかれば、コンサートを楽しめと思うが、知識がないのでイメージが湧かず、何が良いのかよく分からない。クラシック音楽について気軽に何でも質問できて、答えてもらえると嬉しいし、楽しい。

Persona:観客（そろそろ大人になりたい若者）初級者



Name: 小野 信一
Age: 26
Gender: 男性
City: 戸塚
Occupation: セールスフォースドット
コム の 経 理

Personal Profile:

神奈川県生まれ。新横浜、両国 の元から独立し、一駅先のマンションで一人暮らしを始めた。仕事は3年目を迎え、慣れてきたところでそろそろ彼女が欲しいと思いはじめ、大人にステップアップしたところをSNSにアップしたい。

Working Profile:

売り手市場に転じた年だったが、日本の大手IT会社は不採用で所望のセールスフォースドットコムに就職した。営業、会場でPaaSへの移行の道のシステムプロジェクトに参加することが出発点、新しい経験を積むことが出来た。今ではシステムも安定し、四半期毎の発表期と、月半ばの遅く着いた時期をうまく利用して、プロジェクトをこなしている。

Mental Model:

見ると：近づく、質問する、手に取る、気になる

聞くと：返す、答える、聞き返す、感心する、納得する、驚く

Goal:

- ・彼女が欲しい
- ・そろそろ大人のたしなみ（趣味など）を身に付けたい
- ・人と違った体験がしてみたい

図 3.3: Persona : 観客 そろそろ大人になりたい若者

3.2.2 メイキングストーリー

前述のターゲットペルソナを想定し、必要に応じてスキットも交えながらそれぞれのターゲットペルソナのストーリーを作成した。

そろそろ大人になりたい若者

きょうは、初めてのクラシックコンサートだ。今度彼女とデートする時、クラシックコンサートに誘ったら、ちょっとカッコイイだろうなと思う不純な自分がいる。とりあえず、試しに友達と一緒に試してみることにした。会場に向かう電車でspotifyを使って予習しようと、「クラシック音楽」で検索をかけて出てきたplaylistをかける。会場近くの駅で待ち合わせている友人とラインをしながら、結局あまり聴けなかったけど…

チケットを見せて、ホールに入った瞬間、ちょっと大人な空間を感じる。着席し、早速携帯を開いたらまさかの圏外。まあいいかとプログラムに目を通す。読

Persona: 観客（人間として成長したい若手経営者）初級者



Name: 杉島 遼 (ハルカ)
Age: 43
Gender: 男性
Occupation: CEO & Founder of Remotie

Personal Profile:

学生の頃から多趣味で、今までもたくさんの事業に関わってきた。趣味は、音楽鑑賞とキャンプ。船好きで、小学生の子供が二人いる。優しい性格、リーダーシップもあって周りから慕われている。

Working Profile:

新卒でリクルートに入社し、当時の同期三人で27歳という若さでRemotieというコワーキングスペースを創業し、今では社員200人を率いる会社の社長。海外にも拠点があるほど成長した。ビジネスディベロップメントからコーポレートファウンデーションまでマネジメントした。キーノートスピーチやイベント登壇も月々出ている。今は少し余裕ができて、趣味に時間をかけている。

Mental Model:

見ると：近づく、目に留める、質問する、手に取る
聞くと：答える、メモを取る、質問する、感心する、思い出す、覚える

Goal:

- ・ネットワーク（人脈）を築きたい。そこからさらにその人脈を広げたい
- ・教養を深め、人間の幅を広げたい（インテリгентな人間になりたい）
- ・社会へ貢献したい

図 3.4: Persona：人間として成長したい若手経営者

んでも意味不明すぎるが・・・しばらくしてコンサートが始まり、ヴァイオリニストが入ってくる。「わーお、すごいドレス。やっぱり大人の空間だ」。

そのヴァイオリニストは、自己紹介をすると最初に演奏する曲の解説をしてくれた。先ほど見たプログラムに書いてあった、バッハについてだ。中学校の音楽室にあった、もじゃもじゃのかつらをかぶったおじさんを思い出した。なんか暗い感じのおじさんだったなあ。そして演奏が始まった。聞こえてくるバイオリンの音色に聴き入る。いつもはデジタルな音ばかりで、こんなに近くで生の音を聴いたことはなかったなと、意外に響く生の音に感動する。それに、何やら聞いたことのあるメロディーだ。プログラムをみると、題名が書いてある。僕が聞いたことがあるくらいだから、よっぽど有名な曲なんだろうな。

何曲か解説付きの演奏が終わると演奏家がクイズをするという。3 択の曲当てクイズ？ えー、正解は何番だろう。わからないけど、皆が手を上げるので、自分も2 番目に手を上げる。わっ、正解だ、やったー。あてずっぽうで手を上げたが、そのあとの解説で意味がわかって良かった。

正直、アクションのないコンサートは退屈するかもと思っていたけど、丁寧に

Persona: 観客（時間を有意義に過ごしたい退職者）初級者

	Personal Profile 福岡県出身。大学ではゴルフ部に所属し、その縁で結婚。奥が二人いる。長女はホテル業界に就職、独立した。次女は物流業界に就職し、まだ同居している。妻は専業主婦だったが、最近はお客が経営しているウェブサイトの会社の手伝いで忙しそうである。ゴルフは会社関係のものではなく、千原のゴルフ会員権を仲介しており、親しい仲間たちと定期的に集まっている。最近健康を考慮して、毎朝ウォーキングを始めたが、一人だと寝れないかもしれないと不安になっている。
	Working Profile 慶應大学法学部を卒業後野村不動産に就職した。退職前の10年間は、マンション管理、業務課の課長をしていた。60歳以降の退職後生活が思い、定年退職後会社にとまるかどうか迷ったが、給与水準がかなり下がること、仕事内容は今まで部下がやっていたような事務の処理等もやらなければならないこと、妻も子供も収入があることからいったん会社は退職することにした。現在は、毎日新聞を朝から晩まで読み、ゆっくり朝食を取ったり、平日にゴルフができることを楽しんでいる。しかし、最近読者の「定年後」を読み、人生のいざりやを考え始めなければいけないと思った今日この頃である。
	Mental Model 見ると：近づく、身に留める、質問する、手に取る 聞くと：メモを取る、思い出す、覚える、書く、感心する
	Goal ・あと2-30年をどのように過ごすか人生設計を組み立てたい ・せっかくたっぷりある時間を有効に楽しく過ごしたい ・会社員時代にできなかった、何か新しいことを学びたい

図 3.5: Persona : 時間を有意義に過ごしたい退職者

説明してくれたり、こぼれ話があったりして、結構楽しめた。曲も、一曲一曲はそれほど長くなく、いろいろなのが聴けて得した気分。写真も撮っていいと言われたから、ヴァイオリニストが目をつぶって弓を高く引き上げるところをパシャと撮った。これは、後でインスタにあげておこう。演奏中の写真を撮れるコンサートなんて、あんまりなさそうだから、ちょっと特別な感じになるかも。

人間として成長したい若手経営者

仕事関連の知り合い社長と食事会をする中でちらほら出てくるキーワード、クラシック音楽。話のレパートリーとして、もっとクラシックについて深く知りたいと考えていた。仕事に忙殺されていたが、少し余裕を持って、視野を広げること重要だ。雑誌や、新聞の文化欄に出ている評論家のコメントを読んでも、今いちピンと来ない。音を活字で理解するのはちょっと難しいのだ。生のコンサートに行ってみたいと思い、ネットで予定に合うコンサートを見つけ、チケットを購入した。



図 3.6: アイディエーション・スキットの様子

時間があるときに予習しておこうと思っていたが、結局忙しく気づいたら当日になってしまった。平日の 19 時開場なので、ぎりぎりまで仕事をし、タクシーで会場に向かう。IT 会社で、普段ラフな格好で仕事をしているが、今日のコンサートはカジュアルとのことで、会社からそのまま行けるのが嬉しい。

コンサートが始まって、クラシック音楽のダイナミックな音と深みのある音色に驚く。音の波がステージから直接自分の体に次々に届く。やっぱり、ホテルの BGM とは違うよなと思う。思わず目を閉じて、聴き入ってしまった。

演奏が終わると、曲にどんなイメージを持ったか聞かれた。何か柔らかな緑の葉を付けた林を思い浮かべた。5 月のそよ風が木々を揺らし、緑の葉っぱがくるくると舞っている。ああ、こんな聴き方があるのか。曲を聴いてイメージを膨らませていくのはなんだか楽しい。他の観客が感想を述べている。季節は冬で、木枯らしが枯れ葉を運んでいるイメージだそう。季節は違うが、葉っぱを風が運ぶということは同じだ。へー、人によって感じ方が違うんだなと思うとともに、似ているところもあるのが面白かった。

公演が終わり、ラウンジを覗くとたくさんの人が会話をしているのを目にする。

直接演奏家たちと話せるようだ。バーでワインを頼み、演奏家を囲む人々の輪に近づいた。演奏会中に思っていた疑問を、演奏家にぶつけてみる。前から不思議に思っていたが、ネットで調べるほどのことではないし、かといって周りに答えをくれるような友人もない。でもちょっと気になっていたのだ。演奏家の答えを聞いて、妙に納得した。

帰りの車中で、感じたことをプライベート用の日記アプリに書いた。クラシック音楽の聴き方がちょっと変わったような気がする。演奏されていた曲をアマゾンミュージックで探し、イヤフォンで聴きながら、クラシックって意外といいなと思いながら帰途についた。

時間を有意義に過ごしたい退職者

退職後、今までしてこなかった家族サービスをしたかったが、妻は思いのほか忙しく、温泉旅行にはなかなか付き合ってくれない。野村不動産の2年先輩の川上からBCCでメールが来た。彼は、退職金と貯蓄で、赤坂にレストランを開いたとのことである。フレンチレストランで、毎週金曜日にクラシックコンサートがあるとのこと。今度の金曜日にピアノとバイオリンのデュオコンサートがあるので是非どうぞとのお誘いだった。チケットを買わなくても、食事しながらクラシックが聴けるなんて最高かもと思い、思い切って妻を誘うと、金曜日の夜は空いているとのこと。早速先輩の店を予約した。

久しぶりに妻と外食だ。しかもクラシック・ミニコンサート付き。その日は妻と6時半に赤坂見附で落ち合うと、先輩の店に向かった。食事を終え、8時よりコンサートが始まった。40人ほどでいっぱいになってしまう店で、真ん中のスペースにグランドピアノが置いてある。そこで、ウィーンから帰ったばかりというバイオリニストの佐原敦子が演奏を始めた。こんなに近いところでクラシックの生演奏を聴くのは初めてだなと思った。クラシックといっても、お固い感じはなく、ピアノとヴァイオリンの奏でるハーモニーが心地よく響いている。距離が近いせいか、演奏者の息遣いまで聞こえてくる。ところどころ、曲の解説が入ったり、クラシッククイズなどで聴衆を和ませるのがうまい。もともと、美味しいお酒と食事を済ませた後の満たされた状態で聴く演奏は、本当にリラックスできて楽しかった。

た。妻も、一週間の仕事の疲れが取れたと言って喜んでくれた。

40 分ほどの演奏が終わると、質問コーナーというのがあった。先ほどのクイズもそうだが、堅苦しいと思っていたクラシックが身近に感じられる。質問コーナーでは、佐原の留学時代の話が聞けたり、彼女の音楽に対する想いなども聞くことができた。一人の演奏家としての佐原のイメージが少しわいてきた。今までのコンサートでは、演奏家は遠い存在でしかなかったが、演奏家とて一人の人間だ。佐原の意外にお茶目な一面を垣間見たような気がした。

最後に、自分のテーブルにきた佐原と話し、握手をした田中は、質問コーナーでのウィーンでの苦労話を思い出すと、彼女を応援したい気持ちが湧きあがってきた。

3.2.3 ユースケースとコンセプト

前述のストーリーを元に、初級者がクラシックコンサートを楽しむユースケースを抽出し（図 3.7 を参照）コンセプトを作成した（図 3.8 を参照）。

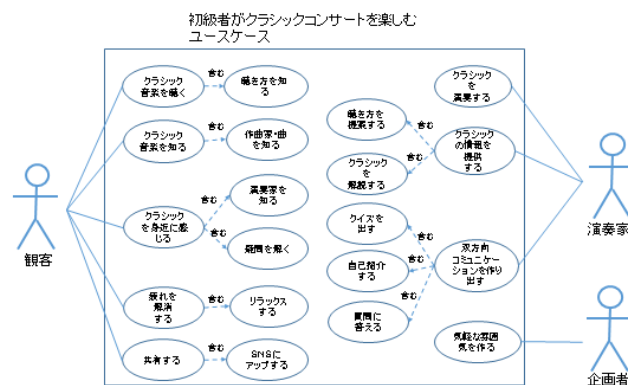


図 3.7: 初級者がクラシックコンサートを楽しむユースケース



図 3.8: コンセプト

3.2.4 コンサートの仕組み (プロトタイプ) 作成

MinC コンサートでは、前述のユースケース、コンセプトを元に、1) 開催場所の雰囲気作り、2) 情報の提供、3) 観客と演奏家の間の双方向のコミュニケーションの創出を取り入れた仕組みを検討した。また、演奏会のフォローアップとして4) フェイスブックの公開ページと演奏会ごとの非公開グループを作った。以下に、検討結果を説明する。

会場の雰囲気づくり

クラシックコンサートの先入観を取り除く 観客たちは、クラシック音楽に対して興味があったり、少なくともニュートラルな立場の人々だが、クラシックは静かに聴くものというイメージはかなり浸透していると考えられる。これでは、インタラクションは起きにくい。また、こういったイメージを演奏家一人で壊すのは大変なので、観客に対しては、募集時やコンサートのオープニングで、コンサート中の双方向コミュニケーションを楽しんで欲しい旨アナウンスする。

会場設定 インタラクションの起きやすい設定として、会場の広さ、座席の並べ方、観客と演奏家との距離を工夫し、親しみやすさや、リラックスする雰囲気が好ましい。座席の設置もできるだけ演奏家を取り囲むような形式にする。

その他 演奏中の飲み物（コーヒー・紅茶、ペットボトル飲料など）を可とし、リラックスして音楽を聴いてもらう。リラックスしてもらうことで、自分の感情を素直に現したり、体を動かしたり思わず拍手をしたりできるかもしれない。また、従来のコンサートでは考えられないが、演奏中の写真を許可する。演奏家本来の姿である演奏中の写真が手に入ることで、コンサート終了後にパーソナルな思い出となる可能性がある。

観客への情報提供

解説をする 何事も、知識があった方が興味がわき面白くなるが、初級者の場合、事前に下調べをしてもらうことは期待できない。本年 1 月に行われた慶應大学ワグネルのコンサートにおいて、8 名の初級者に作曲者と曲の形式（ソナタ形式）についての情報を事前にフェイスブックメッセージで送ったが、誰も読むことはなかった。そこで、事前の情報ではなく、コンサート中に得た曲の背景や作曲家の想いなどの情報を提供することにより、初級者の興味を高め理解を助けることを試みる。

曲の聴き方の提案 楽しみ方がわからない観客に、楽しみ方を提案する。

観客と演奏家のインタラクション

自己紹介 どのようにして現在に至ったかを含める。甲子園のチーム紹介のように、現在への道のりを共有することで演奏者への親近感を感じてもらえるのではないかと。ただし、時間が短いことと映像がないことを鑑み、工夫が必要である。

観客への質問 演奏家が観客に質問することにより、観客に興味を持っていることを示し、観客を双方向のコミュニケーションに引き込めるのではないかと。

トーク（対話） 演奏家が、自分の想いや考え方を伝え、観客の興味を喚起する。

クイズ 作曲家、曲、楽器などについて、「こぼれ話的」なクイズを出すことにより、観客の興味を喚起し、楽しい気持ちになるのではないか。

質問コーナー クラシック音楽、楽器、演奏家自身についての素朴な疑問などを気軽に質問するように働きかける。わざわざインターネットで調べるのは億劫でも、簡単にその場で質問できるとなればかなりハードルは下がるし、どんな初歩的質問も答えてもらえば嬉しいと考えた。

グループフォト 演奏会后、全員で演奏家を囲み写真を撮影する。ライブで同じ時間を共有した参加者が、思い出を残せるし、SNS での拡散も考えられる。

交流タイム 全員に交流タイムに残ってもらい、演奏家と話したり、観客同士で話したりできる環境を作る。演奏家がオープンスペースにいたり、観客席を回ったりする。観客が直接演奏家と話す機会を設けることで、観客がプレミアム感を味わったり、その演奏家やクラシック音楽に親近感を抱くと考えた。

SNS による公演後の繋がり MinC コンサートの仕組みにより、観客が、公演後何らかのつながりを求めたり、自分の経験を継続的に同じ経験をした者同士で共有したいという思いが生まれる可能性を検討した。フェイスブックのパブリックページおよび非公開グループを準備し、観客がその気になれば参加できるようにする。

3.2.5 MinC コンサートの命名とロゴ

本研究のコンサートは、従来の一方的なコンサートではなく、双方向のコミュニケーションにより観客がコンサートに参加できるというものである。そこで、「みんなでクラシック」を標語に決定した。更に、ローマ字表記にし、Min-na-de Classic を短縮して、「MinC」(ミンク)と命名した。また、親しみのわく動物をアイコンとし、MinC と動物のミンクをかけてロゴを作成した。

(図 3.9 を参照)(図 3.10 を参照)



図 3.9: ミンクを使ったロゴ



図 3.10: MinC コンサートのポスター 見本

3.3. アクションリサーチとしての MinC コンサートの実施計画

各ステークホルダーである、観客、演奏家へのプロポーザルを行い協力を依頼した。(注：観客へのプロポーザルは募集要項に記載。演奏家への企画書は付録を

参照のこと)

3.3.1 観客へのプロポーザルと協力依頼

観客としての協力者募集にあたり、以下の募集要項を「告ちーず」、フェイスブックイベントにより告知、及び拡散依頼を行う(図3.11を参照)。集客状況が思わしくない回については、個別に知人への協力依頼をメール・ライン等で行った。また、コンサートを有料とすることにより、クラシックに全く興味がない、嫌っている人々のスクリーニングを試みた。今回の実験の前提である、クラシックに興味があるが、コンサートへあまり行っていない観客を被験者とするためである。ほとんどの観客は、何か面白そうなコンサートということで興味を持ってくれた。

観客への価値提案

- クラシック音楽の予備知識なしにコンサートを楽しむことができる
- クラシックの堅苦しい約束事を気にせず、音楽を楽しむことができる
- 演奏家と直接対話し、演奏家のことを知ることができる
- 演奏家から語ってもらったクラシック音楽について、質問できるので、自分の興味を満たすことができる
- 写真などを SNS で共有でき、自分のコンサート経験を作ることができる
- 他の観客、演奏家とコンサート後もつながることができる

3.3.2 演奏家へのプロポーザルと協力依頼

以下の実験コンサートの趣旨を各演奏家に伝え、協力を依頼した。演奏家は、観客と直接話ができ、フィードバックをもらえることに対し興味を持ってくれた。また、どうしたら観客が喜んでくれるのか実験的に行えること、コンサート後に観客と繋がる可能性があることなども、彼女たちが協力を申し出る理由となった。

アクションリサーチ計画3.3 アクションリサーチとしての MinC コンサートの実施計画

<募集要項>

実験クラシックコンサート 協力者募集！！

- ・好奇心旺盛な方
- ・クラシック音楽に興味のある方
- ・コンサートに参加し、仕組みについてフィードバックをしてくれる方

=====

日程：X月X日（曜日）

開場：x x : x x

開演：x x : x x

場所：x x x x x x x x x x x x

料金：1500 円

=====

私達、慶應大学大学院 メディアデザイン研究科のチームは、普段クラシック音楽に馴染みのない方が、クラシック音楽をもっと身近に楽しんでもらえるようにするためにどのような仕組みが必要なのかを研究しています。

今回、プロの演奏家であるヴァイオリンの佐原敦子氏、ピアニストの今川恵美子氏の協力を得て、実験的コンサートを開催することになりました。

クラシック音楽の知識がなくても楽しめる、観客と演奏家との対面コミュニケーションによる観客参加型のコンサートで、楽しいコンサート経験をしていただくことが狙いです。

クラシック音楽に興味があるが、敷居が高いと思っているクラシック音楽初級者、および年に1-2回コンサートに行くライトユーザーの方で、好奇心を持って実験に参加しフィードバックをしてくださる方、お待ちしております。

<ご案内>

服装：気軽な服装でお越しください

持ち物：スマホ、ペン

演奏時間はMCを含め40分ほど。演奏後20分ほどの交流タイムあり

写真、SNSへのアップOK。演奏家への質問歓迎。

グループフォト撮影あり

最後にアンケートにお答えください（8分ほどかかります）

【演奏者プロフィール】

～ 割愛 ～

図 3.11: 募集要項 見本

それぞれのキャラクター、経験により、インタラクションの起こし方に違いが考えられるため、仕組みと意図を提示し、個々の演奏家に合った形で導入してもらった。また、2回目以降の実験については、前回までの観客のフィードバックを含む結果を伝え参考にしてもらった。

演奏家へ伝えた実験コンサートの主旨

初級者に敷居が高いと思われるクラシック音楽を身近に感じ、演奏家にも親しみを感じてもらい、コンサートへ気軽に足を運んでもらえるようなコンサー

トの仕組みを作り出す。

演奏家に提示された仕組み

コンサートの作法、クラシック音楽について知らなくても楽しい体験をしてもらう

- クラシックのことを知らなくても楽しめると宣伝し、勧める
- 写メ OK
- 自分の感情を素直に表現できる（拍手や、体を動かすなど）
- 飲み物（ペットボトル）持ち込み OK

クラシック音楽への理解を深め、演奏家に親しみをもってもらう

- クイズを出す
- 質問コーナーを設ける
- グループフォトを演奏会後に撮る
- 演奏会後、交流会を設ける（ジュース・お茶・お菓子など）

クラシック音楽・演奏家に継続して親しみをもってもらうために、SNS コミュニティを使い演奏家、観客にフォロー・参加してもらう

- フェイスブックページ（パブリック）でコンサート、演奏家の情報を共有する
- フェイスブック 非公開グループを演奏会ごとにつくり、参加者が写真、コメントを投稿できる

演奏家への価値提案

- 演奏する機会と、参加者と直接対話する機会を同時に得ることができる
- 参加者からのフィードバックを得ることができる
- Facebook page 等で写真の共有・拡散してもらえる（宣伝効果）
- 今後のコンサート情報を共有・拡散してもらえる
- コンサート終了後も参加者と繋がれる（将来のファン）
- 参加者と一体感を持てる

第4章

実験的コンサートによるバリデーション

実験コンサートは3回にわたり、観客、演奏家、場所を変えて実施された。この実験により、双方向コミュニケーションのあるコンサートの有効性をバリデートする。

第一回目：平成30年5月19日に名古屋のスタジオ・グリットにて

第二回目：平成30年5月29日に下北沢のHalf Moon Hallにて

第三回目：平成30年6月2日に天王洲アイルのスタインウェイ東京にて

4.1. MinC コンサート Vol 1 の実施

4.1.1 実験コンサートの詳細

タイトル：MinC コンサート Vol 1

日時：5月19日（土）2018

会場：スタジオ・グリット 名古屋市天白区（図4.1を参照）

演奏家：紫竹友梨氏（チェロ）

観客数：16名

スタッフ：MinC コンサート事務局2名、スタジオ・グリットスタッフ2名

4.1.2 プログラム進行の様子の記事

コンサート前は思い思いに過ごす観客 一番前の観客は、手を伸ばせば演奏家に触れるくらいの距離感である。また、スタジオにはコーヒータブルがセットされており、観客が席に着くとコーヒーマシーンが一人一人にふるまわれた。観客の椅子の高さは30センチの低いもので、観客同士がテーブルを挟んで斜めに向かい合って座った。テーブル席には10名、その他の6名は壁に備え付けのベンチに腰掛けた。観客は荷物を置いて席に着くと、配られたプログラムをみたり、コーヒを飲んだり、隣同士で話したりしながら、開演を待っている。

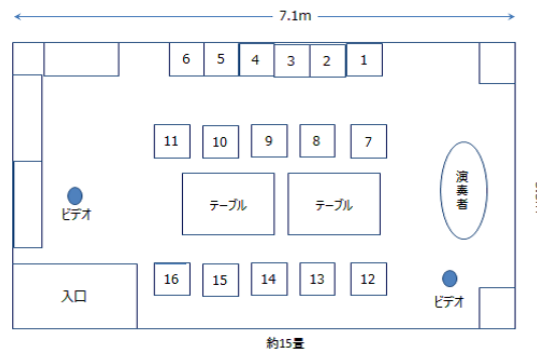


図 4.1: コンサート会場見取り図

オープニングから演奏家のメッセージを一生懸命聞こうとする観客 MinC コンサート事務局より、観客と演奏家の双方コミュニケーションを目指したコンサートであることを説明した。観客が事務局の方を向いて頷く。実験のためのビデオ録画の説明と、「NGな場合は顔を黒塗りにしますが」との問いかけには笑いが起こり、NGを申し出る客はいなかった。

演奏家の紫竹さんが会場へ入ってくると、観客は皆拍手で迎え彼女が前方へ移

動するのを目で追った。紫竹さんが挨拶し、すぐに観客に向かって質問した。クラシックコンサートに行ったことがある人、弦楽器のコンサートに行ったことがある人、チェロー本の無伴奏のコンサートに行ったことがある人という問いかけに、周りを見回しながら恐る恐る手を上げる人、ずっと手を上げる人、まちまちである。冒頭から質問され戸惑った様子の客もいたが、ここから観客と紫竹さんの対話が始まった。結果、クラシックコンサートはほぼ全員が行ったことがあるが、弦楽器とチェロー本は2-3人だった。クラシックといえばオーケストラである。弦楽器のみや、チェロー本はマイナーなのでやっぱり少ないですねというのが紫竹さんのコメントだった。紫竹さんは、チェロー本で一番有名なのはバッハの無伴奏組曲で、本日の最後にも演奏する旨説明した。このバッハの曲は、元々エチュード（練習曲）だと思われていたが、パブロカザルスによって研究され、今日のようにコンサートで頻繁に弾かれる曲となった経緯を説明すると、数人が深く頷く。紫竹さんが、きょうのコンサートの最後は、そのバッハの無伴奏組曲から3曲を演奏する旨説明すると、何人かがプログラムに目をやった。

1曲目の「愛の挨拶」で、想像しながら曲を聴く観客 遅れて到着した観客が着席するのを待ち、紫竹さんが1曲目のエルガー・愛の挨拶を演奏する。演奏前にどんな場面に作られた曲か想像して聴いてみてくださいと観客に促す。プログラムを確認したり、コーヒーを飲みながら聴く観客がいる。一方、大半の観客は、曲の場面を想像するかのように目をつぶり、じっと聴き入っている。題名が「愛の挨拶」なので、きっと誰かが誰かに愛をささやいているのだろうと推測しながら聴いた客が多かったのだろう。演奏後、紫竹さんが、「作曲家が妻に送った愛の手紙のようなもの」と解説すると、拍手をしながら頷く観客が多かった。図4.2を参照)

2曲目の「イエスタディ」で、知っている曲を楽しもうと努力する観客 ポップスだった「イエスタディ」が学校の教科書に載り、クラシック扱いをされているとの説明があるが、観客の年齢層は高く、どちらかというと、ビートルズをライブで聴いていた人たちである。チェロー本の音色は、いつも聞きなれているビートルズとは違い、少し単調だ。自分の期待していた「クラシック」とも違うし、「ポッ



図 4.2: コンサート開始時の観客の様子

ブス」のリズムより随分ゆっくりで口ずさめない。観客はじっと聴き、自分たちの良く知っている曲を演奏してくれた紫竹さんに、静かに拍手をする。

拍手の後、きょうは演奏中でも写真 OK との説明があった。何人かの客は、「えっ、撮ってもいいの」と事務局の方に顔を向け、確認しながら携帯を取り出し、いつでも写真が取れるように手元に置いた。

チェロの面白クイズで盛り上がる観客 チェロがバッハ以前と変わった点は何か？というクイズが出された。1．弦の数が今は4本だが3本だった、2．エンドピンがなかった、3．弓の材料が現在の馬のしっぽではなかったの三択である。三択の説明をする間、観客は演奏家の持つチェロをのぞき込むように見る。さあ、何番でしょうと問われると笑いが起こる。演奏家が一問ごとに手上げを促した。1番に手を上げたのは3人で、不安そうに迷いながら手を上げていた。2番は大半が手を上げた。ずっと手を上げた人が多く、人数が多かったので安心したようだった。3番は一人が小さく手を上げた。2番が正解と伝えられると、笑いと共に観客同士が見合ったりした。昔はエンドピンがなかったとの説明に、身を乗り出して楽器を見る観客が多かった。今までチェロのエンドピンの存在さえ気づいていなかった観客たちが、一斉にエンドピンに注目する。次々と関連した質問が投げかけられた。

紫竹さんが昔のチェロと同じように、エンドピンを収納してワンフレーズを弾

く。観客は身を乗り出して演奏家の方を見る。「エンドピンのあるのとないの、どちらが好きですか？」と紫竹さんに尋ねられると、不意を突かれたように観客はザワザワし、お互いを見合って誰も答えない。観客の一人が、「エンドピンで音に違いが出るのか？、ない方が強く弾いたと思ったが」と逆に質問し、他の観客も何人かが同調した。紫竹さんは、同じように弾いたが楽器の角度が変わるので体重のかかり方が違ったかもと説明した。場がどんどん和んでいく様子が見られ、笑いが何度も起きた。

引き続きチェロの弦の話となった。演奏家の弦へのこだわりの話となり、二本ずつ別のメーカーの弦を張ることも多いという。皆うなずく。紫竹さんは今自分が気に入っている弦の組み合わせを説明した。弦は、値段が高ければいいという訳ではなく、楽器との相性もあるとの説明。高い弦を買っても合わなかったりするという話に、観客からは「そういうことあるんだ」という反応があった。紫竹さんが、買って合わないショックを受ける、チェリストは皆、弦をどうするかですごく苦労しているという話をすると同情の頷きがおきる。そして、値段当てクイズとなった。高音の弦と低音の弦、どちらが値段が高いか手上げる二択クイズだ。弦は太い方が一般的に高いとの説明に、正解した人も不正解だった人も笑顔で盛り上がった。(図 4.3 を参照)



図 4.3: クイズで盛り上がる観客

3-5 曲の歌劇シリーズを聴き、音楽を自由に聴くことを楽しみ始める観客 3 曲目はメンデルスゾーンの「歌の翼に」が演奏され、紫竹さんは場面をイメージしながら聴くよう促した。演奏中はプログラムを見たり、写真を撮ったりする観客、一所懸命聴き入っている観客がいた。演奏後、どんなイメージか尋ねられると、手を口元に当て笑う客、下を向く客がいた。「これだけ聴いて、イメージするのも難しいですね」と紫竹さんが言うと、それに呼応して笑いながら「街へ出てきて故郷を思い出しているような感じがした」とコメントする客がいた。それに同調し、「私もそう思いました。間違っているかもしれないけれど…」とのコメントが続いた。紫竹さんが、曲のイメージを持つことは自由で間違いはない、歌詞がそのイメージと同じかどうかは別の問題で、不正解がないというのが音楽の素敵などところだとの自説を展開した。多くの観客が、「自由に聴く」ということに反応し、安心したように頷いた。その後、実際の歌詞が紹介された。日本語への翻訳のせいもあり、歌詞そのものは難解だったが、この曲が作曲された時代背景を聞いて、笑いが起きた。その時代、インドという国はパラダイスだと思われていて、インドに一緒に行こうよという歌だったとの説明である。今のインドとのギャップを感じた驚きの笑いだった。頷きながら、その説明をプログラムに書き留める客もいた。

4 曲目はビゼーのカルメン・ハバネラが演奏された。誰でも一度は聞いたことのある曲である。演奏中は身体でリズムを取ったり、上を向いて目をつぶって聴く姿が見られた。赤いバラを手にした情熱的なカルメンを思い浮かべたに違いない。演奏後、歌詞が読まれ解説があった。具体的な歌詞を聞くと、自信満々に男を誘惑するカルメンが描かれている。危険な香りのする女性が情熱的に歌うアリアとの説明に、好きか嫌いかは別として、観客が深く頷く。

5 曲目のマスカーニのアベマリアでも、イメージしながら聴くという提案がなされた。演奏後、観客は腕を組んだり、首を傾げたりしている。紫竹さんが、色でも風景でも、どんなイメージを持ったか聞きたいと促すと、一人が口火を切り、「10 時か 11 時くらいの、暑くもなく、もやもやとした感じ」と述べ他の観客の笑いを誘う。もう一人が「オレンジ色のイメージ」と答える。紫竹さんは色にもキャラクターがあり、色でイメージするのは素敵とコメントする。すると、一人

が「亡くなった妻を思い浮かべている。生前は喧嘩してたのに…」と言い、みんなで大笑いとなる。そのコメントに触発され、別の客が「私も、誰かに想いを届けているように感じた」と呼応した。周りの皆も深く頷いている。紫竹さんが、心に湧きあがってきたことを言うのはすごく素敵だと観客に伝えた。そして、音楽に間違いはないので、自由に聴いていいと再び強調した。観客は、初めは自分が間違っていたらどうしようという気持ちがあったが、自由に聴くということを奨励され、肩から力が抜けたようで、自分の感じたことを素直に口に出すようになった。

質問コーナーで気軽にどんどん質問し、相乗効果で一体となる観客 次の質問コーナーは、演奏家がチェロの値段とスリーサイズ以外は答えますと言って始まった。どうしてチェロを始めたのか、子供のころ大変だったことなど、演奏家自身に対する質問を始め、クイズに出たエンドピンについての追加質問や、楽器についての質問が矢継ぎ早に出された。観客と演奏家の間には会話のようなやり取りが起き、両者とも何度も大笑いする場面が見られた。観客の大爆笑で、紫竹さんもノリノリになり、どんどん面白い逸話が湧き出てくる。観客が更に反応し、化学反応は観客同士にも広がった。隣同士で笑い合う観客や、のけぞって大爆笑する客もいた。全員がその場を共有できた時間となった。

・ どうしてチェロを始めたの?: 「母親に連れられて弦楽四重奏に行ったとき、チェロだけが座っていて、座っていた方が練習が楽だと思ったから」という答えに観客は爆笑する。「母親がピアノの先生で、小さいころはピアノをやっていた。チェロで合奏の楽しさを味わってほしいという母親の思いがあった」との答えに、親しみのこもった笑顔が向けられる。

・ ピアノをやっていたとのことだが、ピアノとチェロとは何か繋がりがあるか?: 楽器の歌わせ方に共通点があるとの答え。でも、今となってはピアノの楽譜が2段になっているのはもう無理。客から「右手と左手で別ですもんね」との合いの手が入り、チェロは一段で良かったというところで、爆笑がおきる。

・ エンドピンの不具合で音が変わるのか?: それほど影響はないと思う。紫竹さんは、この質問で芸大の試験の時エンドピンが不具合でどんどん収納されてしまい、だんだん前のめりになって弾く羽目になったエピソードを思い出した。講評

に「エンドピンは直しましょう」とあった話が披露されると、大爆笑となった。観客も、紫竹さんの素直な解答を好ましく受け取った。

・演奏前はどうしているのか?: 気負ったり緊張すると良い音がでない、それが観客や共演者にも伝わるので、できるだけ緊張しないよう、楽しもうと心掛けているとの答えに、皆感心したようにうなづく。

・チェロが他の弦楽器を違うところは?: 人の声に近いので、心地よい音。歌っているかのような音の作り方を大切にしている。この質問で、紫竹さん自身も、自分が大切だと思っていることを再認識したと観客にお礼を述べ、観客もそれに応えた。

・子供の頃練習で大変だったこと?: 印がないのに音程をとることが苦しかった。勉強を続ければ続けるほど、新しい課題がでてくる。今は音をどうやってつなげるかや、ワンフレーズをどのようにまとめるかがもっと大変だということに気づいた。「自分が成長し続けているということだ」というくんだり、観客はしみじみとしながら話を聞いている。

・練習はどのくらいするの?: 「それ言えな—い」との紫竹さんの答えに大爆笑が起きる。1日でもやらないとダメとよく言われるが、気持ちを切り替えるために、触らない日も設けているとの答えに、観客は優しく見守るようにうなずいていた。

6曲目のバッハで色を思い浮かべながら聴き、自分の色を決めて楽しむ観客 最後は、冒頭で説明したバッハの曲が演奏された。写真を撮ったり、音に合わせて頷きながら聴く客がいた。「何色か思い浮かべてください」と紫竹さんに言われ、色のイメージと曲のイメージを重ねながら聴いていたのか、目を閉じて聴く観客が多かった。演奏後、一人の客が「青。今の時期の空のような」と答えると、紫竹さんは、「私も青です。何ででしょうね。いろんな色をイメージすると世界観が変わってくるかも」と観客が自分の色をイメージしながら聴くことを後押ししていた。頷く客や、「へー」という顔で紫竹さんを見る客、全く違う色を思い浮かべたり、迷ったりしながらも、「音楽に不正解はない」という紫竹さんのメッセージに、観客は自分なりのイメージを持ったようだ。

交流タイムで演奏家と個別に話し喜ぶ観客 すべての演奏が終わると、交流タイムが宣言され、演奏家は2つのテーブルを10-15分ずつ回り観客と直接話をした。同時に、軽食とお茶が振る舞われ、観客同士も食事をしながら話をしていた。会場がおしゃべりで活気づき、2次会のような雰囲気となった。気軽に直接演奏家と話す機会は、そうあるものではないので、観客は質問の続きを個別にしたり、観客同士で話をしたりしていた。時間を大幅に過ぎても帰る客は誰もおらず、交流タイムを楽しんでいた。

4.1.3 アンケート結果について

観客16人中、外国人と高齢の女性以外の14名から回収した（アンケート結果は付録を参照）。知識なしに楽しめたか、クイズ・曲の解説は興味が持てたかとの問いには全員の14人が「はい」と回答し、前述の観察を裏付ける結果となった。具体的な例として、解説により曲が身近に感じられた、楽器のことや曲の意味・内容がわかって良かった、楽しみ方がわかり正解がないということでハードルが下がった、直接演奏家の話が聞けて良かったなどのコメントが寄せられた。

4.1.4 まとめ

第一回目は演奏家の筑紫さん、会場であるスタジオ・グリットの協力で、プロトタイプであるMinCコンサートの仕組みをすべて盛り込んだ形で実施された。（図4.4を参照）

少人数（観客16人）で行われたこともあり、互いの距離が近く、開演前に近くの観客どうしがコーヒーを飲みながら談笑しあったりしていた。冒頭の演奏家からの質問には戸惑う様子も見られたが、対話のあるコンサートであるということを観客がスッと受け入れたことが認められた。リラックスした雰囲気により、観客の受け入れ態勢ができていたといえる。

演奏前には風景をイメージして聴くとか、色をイメージして聴くという方法が提案され、演奏後に観客から感想を述べてもらった。最初は自由に聴くことに戸惑いを感じた表情が伺えた。また、自分が間違っているかもしれないという不安

	仕組み	実施の有無
会場の雰囲気	先入観対策	○
	会場設定	○
	演奏中の飲み物	○
	演奏中の写真撮影	○
情報	曲の解説	○
	曲の聴き方の提案	○
インタラクション	自己紹介	○
	観客への質問	○
	クイズ	○
	トーク	○
	質問コーナー	○
	グループフォト	○
	交流タイム	○
	フェイスブック	○
SNS		

図 4.4: コンサートに取り入れられた仕組み Vol 1

から、皆の前で意見を言うことが憚られる様子だった。しかし、演奏家が、音楽の聴き方に一つの正解はなく、自分の思ったことが正解だと促されると、少し気が楽になった様子で、演奏中イメージしようと努力しながら聴く姿勢が認められた。更に、自ら手を上げて感想やイメージを述べる姿が認められた。

聴いた曲のイメージを述べたり、クイズで手上げをしたり、演奏家への質問など、観客と演奏家の間に、活発に双方向のコミュニケーションが発生した。また観客同士のコミュニケーションも確認できた。クイズは選択・手上げ方式で行ったため、全員が参加できた。演奏家とのやり取りの中で、身を乗り出す、笑う、表情が変わるなど多くのインタラクションが観察された。質問コーナーではかなりの盛り上がりを見せ、楽器や、演奏家自身について親近感を感じることができた様子だった。また、自分の聞きたい質問に答えてもらい、満足した様子が確認された。

4.2. MinC コンサート Vol 2 実施

4.2.1 実験コンサートの詳細

タイトル MinC コンサート Vol 2

日時：5月29日（土）2018年

会場：Half Moon Hall 下北沢（図 4.5 を参照）

演奏家：細野愛美氏（声楽）、宮尾夕華（ピアノ）、相馬優希氏（ピアノ）、菊岡真智氏（フルート）

観客数：21名

スタッフ：MinC コンサート事務局3名

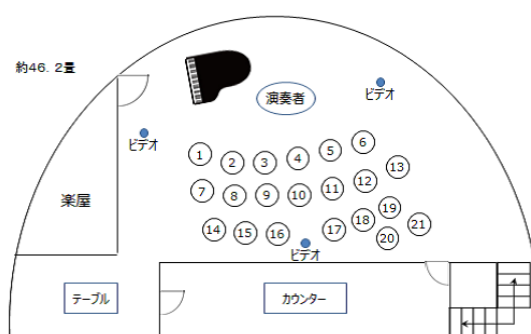


図 4.5: コンサート会場見取り図

4.2.2 プログラム進行の様子の記述

オープニングで様子を伺う観客 オープニングではスライドを使い、双方向コミュニケーションを目指したコンサートであるという趣旨説明があり、観客は壁に映

されたスライドを見ながらに聞いていた。前回より広い会場で人数も増え、最初はシーンとして固い雰囲気があった。「双方向」というのが具体的にどういうことかはわからないが、とりあえず受け止めて様子を見る感じだった。その後、演奏家である、細野さん（声楽）と宮尾さん（ピアノ）が登場し、一曲目の「竹とんぼ」を披露した。演奏が終わると観客は拍手をし、細野さんが今日の演奏会は国立音大出身の4人で演奏すると開催を宣言した。クラシックコンサートということで、楽器の演奏を想像していた観客は、声楽もクラシックなのだと納得し、拍手で演奏家たちを迎えた。（図 4.6 を参照）



図 4.6: オープニングの観客の様子

演奏家4人の自己紹介とそれぞれのクイズで、自分に関係ないところでは飽きてしまう観客。その後4人が順番に壁に映したスライドを使い自己紹介をおこなった。1人目は細野（声楽）さんで、血液型はおそらくA型だという。検査したことはないが、両親の血液型からするとと説明。血液型がA型の人はいるかという観客に尋ねると数人が手を上げた。また、自分自身が日本酒が好きで、来場していた外国人の観客にも日本酒が好きか日本語で聞く。すると、客の一人が英語に訳した。外国人が「Yes, of course」と答えると、会場に笑いが起きた。お酒は世界の共通話題の一つかもしれない。細野さんの自己紹介が終わると、続いてオペラとミュージカルについての間違いクイズが3択で行われた。観客は壁のスライドにある答えを見つめ考えている。1. ミュージカルではマイクを使う 2. オペラはオーケストラもしくはピアノの伴奏で公演される 3. 両方とも貴族のために

制作された劇である。観客は20代の若者が大半で、ミュージカルは映画などでも見たことはあるが、オペラとなると少し縁遠く、違いと言われてもはっきりとわからない観客が多く、手を上げる際、首を傾げたりして迷いながら上げていた。答えは3番と発表されると、「オーっ」という声と共に拍手が起こった。

2番目は宮尾さん(ピアノ)で、出身地、趣味などを紹介した。彼女も日本酒が大好きで、下北沢にお酒のおいしそうなお店がたくさんある話をすると、何人かが頷いた。今見ているテレビ「おっさんずらぶ」にハマっていて、テレビを見ているか問いかけたが、反応は薄かった。宮尾さんは、こんなに話題になっているのに見ていない人ばかりで、がっかりした様子だった。「えっ、見ていないんですか?」との問いかけに、観客の何人かが隣の人と顔を見合わせている。宮尾さんが、今日の放映予定時間を伝え、見てくださいというと、笑いと共に拍手が起きた。

3人目は相馬さん(ピアノ)で、血液型と犬の話をする。愛犬の話で、ポメラニアンが好き。犬を飼っている人がいるか会場に問うと3人が手を上げたが、話題は続かなかった。自分が該当しない質問には答えられず、まだ雰囲気少し硬かったので、反応できずにいる客が多かった。クイズはピアニスト特有の悩みあてクイズで、3択である。手上げをしてもらった後、正解は何かを、会場ではなく、もう一人のピアニスト宮尾さんに尋ねた。宮尾さんの答えは、自分は全部当てはまるだった。観客への問いかけというより、演奏家4人の会話を聞いて、観客が笑ったり、拍手をしたりする形になった。

4人目は菊岡さん(フルート)で、やはり血液型と犬の話をする。自己紹介も4人目となると、同じような話となり、盛り上がりには欠けた。血液型は調べたことはないが、双子の妹がA型なのでたぶんA型と説明には一部で笑いが起こる。犬の話ではプードルを飼っている人がいるか会場に問いかけたが、誰もいなかった。そこで、細野さんが犬を飼っている人がいるか問いかける。チワワを飼っている人と柴犬を飼っている人が手を上げた。しかし、先ほどのポメラニアンの問いかけと同じで、該当者が少なく、飼っている人以外は、話題に入れず話を聞く形になった。その後フルートを吹いて一度に出せる音の数クイズがあった。1) 1音、2) 2-3音、3) 4音以上の3択だ。質問の意味がよく分からなかった観客が首

をかしげるが、手上げを促すと、皆それぞれに手を上げた。1 番に手を上げた観客は、周りがそれほど手を上げていないことに気づくと、「え、違うの」と慌てて手を下した。答えはピアノなどと違い、基本的には1 音だと説明があった。先ほど慌てて手を下した観客は、やっぱり合っていたかと、少し安心したようだった。(図 4.7 を参照) 菊岡さんが、特殊奏法で2 音なら出せると説明し、実演した。観客は興味深そうに菊岡さんを見つめる。この特殊奏法はほとんど使われることはないという落ちに、一部から笑いが起きた。

2 曲目シューベルトの糸を紡ぐクレイトフェンで失恋を嘆く少女をイメージする観客 自己紹介とクイズで、13 分程かかり、1 曲目が終わってから、ずっと演奏がなかったので、事務局より「そろそろ次にいきましょうか」というキューが出た。

シューベルトの作曲数当てクイズから始まった。歌曲とはオペラとは違い、独立した曲で、今でいえば、ポップソングと同じ。若くて(30 代半ば) 亡くなったが、生涯で600 曲以上を作曲したとの説明に、正解だった観客が笑顔を見せた。細野さんは、「多作の作曲家」と前もって説明したため、正解者が多かったようだと言った。この600 曲と言う数字が、どのくらいすごいことなのか、あまりピンと来た客はいなかったようで、細野さんは、単に曲数が多いだけでなく、1 曲1 曲に考えられた素晴らしい歌詞がついていることを捕捉し、一生懸命説明した。演奏の前に、曲の解説があり、ファウストに振られた少女が糸を紡ぎながら嘆いている場面とのことだった。糸車がくるくる回っているように、ずっと同じ旋律が伴奏で流れる。繰り返しのメロディの部分を宮尾さんがピアノで弾いて実演した。観客も、確かに同じメロディだとうなずいている。細野さんが、物語をイメージしながら聴くよう提案し、演奏が始まった。繰り返されるメロディで糸車が回り続けていることを表しているのは明白で、言葉は(ドイツ語) わからなかったが、振られて嘆く少女を思い浮かべるかのように、演奏者を見つめ、手を膝に置いて静かに聴く観客が多かった。

3 曲目リスト編曲の献呈でピアノ曲を静かに聴く観客たち 宮尾さんが、もともとシューベルトの歌曲であるが、リストがピアノ用に編曲したものであると説明



図 4.7: クイズで手を上げる観客の様子

した。宮尾さんが、細野さんに原曲のワンフレーズを歌うよう頼んだ。元々歌付きの曲だったものを、リストが編曲したといわれても、ピンとこないが、とにかく聴いてみようというように、観客は静かに待つ。細野さんの歌ったフレーズが編曲で華やかになっていくとの説明通り、確かに華やかな曲で、ピアノのポロポロという音が響き渡った。演奏後、「ウォ」という小さい声と共に拍手が起きた。ピアノの鍵盤を広く使い、細かい指遣いがありそうな曲で、難曲なんだろうと察した観客の暖かい声援のような拍手だった。

4 曲目シューベルトのしぼめる花をお行儀よく聴く観客たち フルートの菊岡さんが登場した。菊岡さんは、この曲はシューベルトが唯一書いたフルートとピアノの曲で、もっと書いてほしかったと訴えた。元の歌劇は「愛した人が植えた花と一緒に墓に入りたい」というもので、変奏で形が変わっていく曲が、青年の感情の変化を現していると説明すると、観客は映し出されたスライドに目をやったりしながら、一生懸命説明を聞いていた。また、相馬さんが、当時和やかな場所で演奏された曲なので、このコンサートにふさわしく、演奏後どういうイメージを持ったか教えてほしいと付け加えた。4 楽章、約 13 分の曲で、少し長かったが、皆静かに聴き入っていた。フルートの息継ぎがはっきり聞こえる至近距離で、圧倒されたかのように、じっと見入っている客もいた。演奏後、観客の感想を聞き忘れたため、イメージを共有することはできなかった。

最後山田耕作の讃えよ調べよ歌いつれよ 最後は再び細野さんが登場し、宮尾さんの伴奏で山田耕作の歌曲を歌った。「赤とんぼ」で有名な作曲家で、華やかな曲なので楽しんでほしいとの解説があり、演奏された。時間が押してしまい、最後の2曲を割愛した。演奏が終わると4人の演奏家が登場し、最後の挨拶をした。

質問コーナー どんな質問でもいいので、質問してくださいと促され、観客が次々と手を上げて質問した。誰にでも不思議に思っていることは一つや二つあるもので、機会があれば、皆質問するのは好きなようである。(図4.8を参照)

・フルートを吹く時に上下に動いていたが意味があるか?: 動かない演奏家もいるが、動いたほうが表情が出ると思うとの答えだった。菊岡さんは、スポーツと同じで、動きすぎるとぶれるので、体幹は動かさないようにしなければならない言っていた。スポーツとクラシックの共通点の話が出て、妙に納得したようにうなずく観客がいた。

・演奏している時物語をイメージしているのか?: 解釈をし練習してイメージを身体にしみこませる。本番にはイメージを忘れて歌っても大丈夫との答えに、質問した客もうなずいていた。

・普段気を付けていることや、練習はどのくらいするのか?: 歌は身体が資本なので、あまり練習しすぎてもだめ。普段からメンテナンスに気を使っているとの回答に観客が頷く。

・声楽をやっている人はカラオケで何を歌う?: オペラっぽい曲はカラオケにないので、ふつうのポップスを歌う。声楽をやっている友達はカラオケは嫌いな人も多いが、私は宇多田ヒカルや初音ミクを歌うとの答えにギャップを感じたのか、笑いが起きる。

・譜面にはどんなことを書き込むのか?: 譜面にすごく書きこんでしまうが、先生からは曲がわからなくなってしまうほど書き込まないようにといわれている。菊岡さんが自分の譜面を見せると、身を乗り出して見ようとする観客が多くいた。演奏家の譜面など普通見ることはないので、興味津々だった。菊岡さんが、自分(フルート)に何かあってもピアノの相馬さんが全体をつかんでいてくれるので心強い言って、相馬さんの方を見ると、観客席から笑いが起きる。目印に目玉マークを使って、目印のところでパートナーを見ると説明があると、クラシックもコ

ンビネーションが大事なのかとばかりに、観客が頷いた。

・譜面のめくり方？ タブレットも使うか？: フメクリストと呼んでいる譜面をめくる人がいる場合と、自分でめくらなければならない場合がある。自分でめくる場合は、楽譜を切り貼りしたりして工夫するとのことで、演奏家の苦労がしのばれた。タブレットも使えるが、書き込みができない点と、大御所の先生の場合はNGのケースがあるので要注意との説明に、深く頷く観客がいた。有名な演奏家がタブレットを使っているというニュースが広がると、だんだん大丈夫になるかもとのコメントに笑いと共に頷きが起きた。

・ピアノは何歳くらいから習わせたらよいか?: 宮尾さんは3歳、相馬さんは7歳から始めたとのこと。今はリトミックといって1歳くらいから音楽に親しむことができるという説明に、ネットを調べる観客がいた。

・同じ楽器をやる人同士は仲がいいか?: ピアノは一人で活動する人が多いが、私たちは伴奏が好きでやっているので、一緒に活動するのが好き。仲はいいですとの答えに爆笑が起きる。



図 4.8: 質問する観客の様子

4.2.3 アンケート結果について

アンケートは4名の外国人客を除き17名より回収した(アンケート結果は付録を参照)。アンケート結果では、全員の17人が知識なしに楽しめたと解答した。質問、クイズや解説については、内容が観客全員に関係のあるものを選ぶ必要が

あるが、13人が興味深いと回答した。最終的に、このようなコンサートに参加したいかの問に関しては、「クラシックが窮屈という感じはぬぐえなかった」一人を除き、16人がリピートの意向を示した。「質問できるのが楽しい」、「双方向性が良い」、「演奏家の年代が近く、お互いが頑張っている様子が肌で感じられるから」、「演奏家が好き、あの雰囲気、リハーサルみたいなのがいい。ミスっても人間味がある」など、気軽さや、ライブ感を感じた観客が多かったといえる。

4.2.4 まとめ

1回目の実験で、演奏家から観客への問いかけや、観客の感想を言葉に出して言うてもらうことが、双方向コミュニケーションに有効であることが確認できたため、2回目でも、観客への問いかけを取り入れた。しかし、コンサートとは直接関係ない血液型やペットの話に時間を費やしたため、飽きてしまった客がいた。また、1回目と同様イメージしながら曲を聴く提案がなされたが、観客に感想を述べてもらうには至らなかったため、効果は確認できなかった。自己紹介では、それぞれプライベートな部分を紹介し、演奏家に親しみを持ってもらおう試みがなされた。試みとしては良かったが、四人という人数の多さで時間がかかりすぎたこと、同じような説明が繰り返されたことなどで、効果は思ったほどでなかった。時間の管理ができず、一部の曲をカットしたり、交流タイムの時間を十分取ることができなかった。(図4.9を参照)

演奏家が音大を出たばかりの若手で、経験が少なくしゃべりに不安があるとのことで、仕組みの実施のためにスライドを補助的に使った。視覚に訴えることができるため、観客にとってもわかり易い演出となった。質問コーナーでは活発に質問が出、自分の疑問に思っていることを素直に聞く姿が確認された。曲の解説は演奏前に行われた。状況の解説や、関係する歌やメロディーラインを事前に提供したことは観客がイメージ膨らませるのに一役買った。しかし、せっかく持ったイメージを言語化して他の観客と共有するには至らなかった。演奏家たちの、飾り気のないトークは人によっては稚拙に感じたり、逆に友達のような感覚で親近感を感じる客もいた。

	仕組み	実施の有無
会場の雰囲気	先入観対策	○
	会場設定	○
	演奏中の飲み物	×
	演奏中の写真撮影	○
情報	曲の解説	○
	曲の聴き方の提案	○
インタラクション	自己紹介	○
	観客への質問	○
	クイズ	○
	トーク	○
	質問コーナー	○
	グループフォト	○
	交流タイム	×
	フェイスブック	○

図 4.9: コンサートに取り入れられた仕組み Vol 2

4.3. MinC コンサート Vol 3 の実施

4.3.1 実験コンサートの詳細

タイトル：MinC コンサート Vol 3

日時：6月2日（土）2018 年

会場：スタインウェイ東京 天王洲（図 4.10 を参照）

演奏家：佐原敦子氏（ヴァイオリン）、今川恵美子氏（ピアノ）

観客数：30 名

スタッフ：MinC コンサート事務局 3 名、スタインウェイ東京マネージャー 2 名

4.3.2 プログラム進行の様子の記述

オープニングでは硬さが見られ、受け身な観客 オープニングで、従来の一方通行ではなく、観客と演奏家が対話をしながら楽しいコンサートになるかの実験であることが伝えられ、ビデオ収録の了解と演奏後の交流タイム、アンケートへの

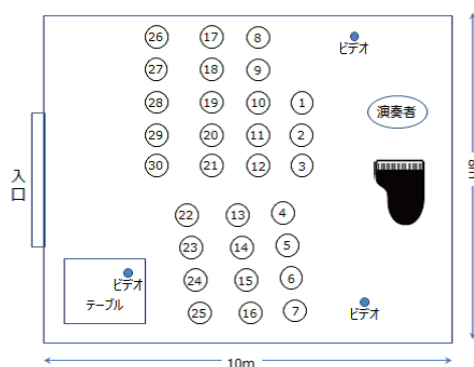


図 4.10: コンサート会場見取り図

協力が呼びかけられた。今までで一番人数が多く、最初から和んだ雰囲気という訳には行かなかった。演奏家二人の名前が呼ばれ舞台に登場すると、観客は拍手で二人を迎えた。佐原さん（ヴァイオリン）と今川さん（ピアノ）が、2回目の実験の結果を踏まえ、短く自己紹介する。佐原さんが、きょうはバロックから現代まで、時代を追ってクラシック音楽を楽しんでほしいと述べ、演奏会が静かに始まった。従来のコンサートの静まり返った雰囲気ではないが、観客からの反応は薄く、受け身な態度が見受けられた。これからどんなコンサートになるのか様子見をしているようだった。（図 4.11 を参照）

1 曲目の G 線上のアリアで原曲より編曲された方が有名になる話に反応する観客バロック時代の説明があり、立役者であるバッハの話につづき、有名な G 線上のアリアが演奏される。時代解説時はうなずく客、プログラムを見る客がいた。演奏中は目を閉じたり、演奏家に見入ったりしながら、じっと聞いている客が多かった。ピアノとヴァイオリンの演奏だったが、ヴァイオリンの音が意外と大きいことで、自分と演奏家との距離の近さに気づく。佐原さんが、この曲が一本の弦で弾かれたことに気づいたかと会場に問うと、頷く客、実際に弦を見せると多くの



図 4.11: オープニングの様子

客が身を乗り出した。もともとバッハは管弦楽として作曲したが、後に編曲され、一本の弦で聴く方が有名になってしまったと聞くと、笑いが起きた。一本の弦と言われ、えっという感じでヴァイオリンの方を見る観客が多く、編曲された方が有名になったと聞くと、えーっそうなの？という感じで反応が起きた。曲そのものより、曲にまつわる意外な話に反応していた。

2 曲目のベートーベンヴァイオリンとピアノのためのソナタで、曲よりもベートーベンの性格の話が受ける。佐原さんが、古典時代の説明をする。作曲家たちがこぞってウィーンに集まってくるのだ。頷いて聞いている客や下を向く客がいる。大多数は佐原さんの方を向いて静かに聞いている。ベートーベンが音楽に革命をもたらした話も同様に、皆静かに聞いている。ベートーベンが癩癩持ちで、急に怒ったり、あ、ごめんと謝った話になると笑いが起きた。音楽に革命を起こした作曲家ベートーヴェンより、人間ベートーヴェンに興味をそそられたようだ。演奏する曲は、ベートーベンの若さが譜面に現れているとの説明後、佐原さんが演奏し始めた。若さが出ているとはどういうことか、頭で理解できても、感覚としてどうということなのか、観客は腕を組んだり、目を閉じたりして静かに聴いていた。

3 曲目ブラームスのハンガリー舞曲で、人間としての作曲家の話に興味を持つ観客。佐原さんが、古典派の次はロマン派の代表ということでブラームスのハンガリー舞曲の解説をする。この曲は当時大人気で、ブラームスもそれで儲けたとい

う話になると笑いが起きる。やはり、お金にまつわる話は、自分に身近な話題として受け入れやすい。曲のテンポにあわせリズムを取りながら聴く客が何人かいる。曲が終わると、「今まで演奏してきた作曲家たちが好きだった飲み物は何だと思いますか？」というクイズが出された。昔からあった飲み物で、今でもあるというやり取りの後、しばらく会場がガヤガヤしていたが、「コーヒー」という正解が観客から出た。コーヒーにまつわる、バッハ、ベートーベン、ブラームスの話が披露されると笑いが起こった。50粒の豆を、毎回正確に曳いてコーヒーを入れていた話や、コーヒー好きが長じて作曲された曲など、偉大な作曲家も人間だということの方が受けている。曲のテンポが良くリズムに合わせて体を動かす観客が何人かいたが、大半は静かに聴いている。

4 曲目ドビュッシー・西風のみたものを聴き戸惑う観客 佐原さんが近代のクラシック音楽は、輪郭をなくすという、美術でいうと印象派のようなもと説明する。今川さんにバトンタッチされ、ベートーベンのようにはっきりした曲ではなく、ぼやとした曲であると説明する。ドビュッシーは、「何だろう？」と思うタイトルを付けていて、今回のタイトルにある「西風」は牛を吹き飛ばすような大風であることを説明した。演奏が始まると、大半が下を向いて聴いていた。演奏が終わると顔を上げて拍手する。曲の好き嫌いもあるが、説明の通りぼやとしていてメロディがはっきりしていなかったのも、よくわからないが、難しそうな曲を一生懸命弾いた今川さんへの拍手だった。

弓の格付けクイズ、ベンツの話で盛り上がる観客 佐原さんが、曲がだんだん技巧的になってきて、楽器も発達してきた経緯を説明した。ヴァイオリンの値段もストラディバリウスなど、よくマスコミに取り上げられるが、弓も意外と高く大変だと説明する。佐原さんが弓の格付けクイズをやりますというと、笑いが起こって観客が佐原さんに注目した。佐原さんが2本の弓を見せ、片方は日本人作家で50万円くらい、もう一つはベンツ一台分くらいと説明すると観客からどよめきがあり、「えーっ」「信じられない」との声がきかれた。二本の弓で同じ曲を聴きどちらかが高いかを当てるよう指示される。身を乗り出して聴く客や、目を閉じて聴き比べる客がいた。最初の弓に手を上げたのは3人で、顔の横に小さく手を

上げている。2 番目の弓は、勢い良く手を上げた観客が多かった。正解は2 番目と聞くと、やっぱりという表情の客と、半信半疑だったが当たって良かったとばかり、隣同士で笑ったり話したりした客が多かった。ヴァイオリンが本体だけでなく、弓も高価だと知るとかなりの反応が見られた。特に、たった一本の弓が自分の乗っている車より高いと思うと、興味がわき、注意が佐原さんの手元に集中した。(図 4.12 を参照)



図 4.12: クイズで手を上げる観客の様子

5 曲目のイザイの無伴奏ヴァイオリンソナタで興味を持って聴き始めたが途中で飽きる観客 バイオリンの技巧的な曲の一つとしてイザイの曲を紹介した。イザイ自身もヴァイオリニストでバッハに触発されて一日で書いてしまった曲と紹介される。ベンツの方(高額な方)の弓を使うというと笑いが起こり、観客は佐原さんの方をみて頷いている。演奏が始まり、しばらくすると、下を向く客や顔を触ったり動き始める客がいた。曲が終わりワンテンポおいて拍手が起きた。直前の、「バイオリンの弓がベンツ」というのが頭に残っていて、そのベンツの弓で弾かれる曲はどんなだろうという興味を持って聴き始めたが、メロディーがない曲で、だんだん飽きてしまったようだった。(図 4.13 を参照)

6 曲目のシェーンベルクファンタジーでポカンとする観客 佐原さんが、現代の代表作曲家の一人であるシェーンベルクという人は12音技法といって、12音を一つずつ同じ順番で使って作曲したと解説。面白いので冒頭だけ弾いてみます



図 4.13: ヴァイオリンの弓に興味を持ち身乗り出す観客の様子

というと、観客が注目する。弾いている間、身乗り出す客もいた。さわりだけ（数十秒）を弾き終わると、しばし沈黙があり、佐原さんが「という…近代音楽です」というと笑いが起きた。演奏前の「12音が…」のくだりは、どういうことなのかわからずポカンとしてしまった客が多かった。佐原さんが気を取り直して、楽譜を見ると12音が一小節の中にちゃんと並んでいてよく考えられていると捕捉説明をした。それでも反応が薄く、そのあとの佐原さん補足説明は独り言のようになってしまった。

7曲目フランクのバイオリンとピアノのためのソナタで一生懸命聴こうとする客とあきらめる客 いよいよ最後の曲となった。佐原さんが、ヴァイオリンとピアノの掛け合いが面白く、メロディは同じだが調が変わって色合いが変わっていくのが美しいと説明した。演奏中、観客は目を閉じて聴いたり、頭を揺らしたりして、曲の色合いが変わっていく様子を聴き取ろうとした。しかし、後半になると下を向いたり、手元のアンケート用紙に目をやる客が出てきた。目をつぶってじっと聴き入る客がいる一方、6分を超える曲は途中で飽きてしまったのか、周りのものをいじったりする客もいた。

質問コーナーで、他の観客に触発され質問し続ける観客 すべての演奏が終わると拍手があり、質問コーナーになった。どんな質問でもいいですよとのことで、すぐに質問の手が上がった。佐原さんの解説に関する捕捉質問や、楽器に関する質

問、演奏家の普段の生活や、嗜好などの質問も出た。次々と質問が出て会場が盛り上がった。質問はあくまでも観客と演奏家の間で行われ、観客同士のインタラクションには結び付かなかったが、他の観客の質問に触発されて出た質問や、他の人も聞いているから私もという客もいた。

・ベンツのように高価な弓はどのくらいもつ（耐久度）?: 「ベンツ一台分の値段」が頭から離れない会場に、笑いが起きる。毛の方は馬のしっぽでできていて、こちらは消耗品なので定期的に変える。3 か月に一回とか。値段も5 千円～1 万円くらいですとの回答で、観客も弓と毛の部分が別物だと初めて気づいたようだ。弓で一番怖いのは湿気などの関係で折れてしまうこと。折れてしまったら買い替えるしかない、骨董品みたいなものです。相性もあるので、パートナーを探すようなもののとの説明に、深く頷く。

・ヴァイオリンの弓の張り具合で音は違うのか?: 関連して、弓の張り具合の質問が出る。あまり強く張ると切れてしまうが、スピッカートのような奏法の時は強く張ったほうが良いかもとあって、実際張りを強くして音を出してくれる。観客は佐原さんの手元を見つめる。

・弓の音の違いは大きい会場の方がわかり易いと言ったがどういうことか?: 良い弓だと、弓が弾いてくれる感じがある。たとえばいいクリームだとお化粧のノリがいい感じという表現に、笑いが起こる。大きい会場だと、弓によっては音が届かない時もあるので、何本かもっていて使い分けるとの答えに、そうかと何度もうなずいている。

・湿度によってトラブルはないか?: ホテルなど乾燥しているので、そこで弓が折れてしまうと困るので霧吹きをしてもらう時もある。乾杯したりすると、ちょうどいい湿気になるので、どんどん飲んでくださいという感じだと聞くと笑いが起きる。

・手が命だと思うが、普段重いものを持たないとか気を付けているのか?: 何人かの観客が、質問者の方を見て頷いている。佐原さんの答えは、普通の人と同じ。マネージャーもいないので、重いものも自分で運んでいる。でも怪我をしないようには気を付けている。保険をかけている人もいるとの話に会場から「へー」との声が出た。

・運動した後などに、うまく弾けなかったりするのか?: 佐原さんが「テニス部だったので」というと、意外だという笑いが起きる。「試合の翌日は手が震えたりした」。観客は、演奏家もそんなに特別ではないときいて、少し身近に感じ、「あるある」の話を聞いて納得している。

・ピアノは自分で選べないがどんな大変さがあるのか?: 今川さんが、「電子ピアノだったりするとちょっと、と思うが、アップライトの時もあるし、その辺は臨機応変に。会場によってとか、ソロかアンサンブルかで音量も調整する」と答えると、頷く観客が何人かいた。「いつも、ピアノも運べればいいなと思っている」の一言に笑いが起きる。

・ヴァイオリンのサイズ?: 大人は大体同じサイズ。

・男性、女性でハンデがあるか?: 筋力があると簡単に弾けることがある。ブラームスとか弾くとやっぱり男性に負けるなと思うことがあるとの話に、「ふーん」とか「へ～」とかいう声があがる。「まあ、か弱い男性もいるんで」の一言で爆笑する。ピアノの場合も、手が大きい方が有利とのこと。

・ヴァイオリンは一人で練習する時は音程がずれたりしないのか?: ラの音を弾いて合わせてから弾くのでずれない。

・自分の耳元で聞こえる音と遠くの客が聞こえる音は違うのか?: 自分の耳元で聞こえる音と、50メートル先の音は違うので、誰かに聞いてもらって調整したりする。

・ヴァイオリンはどちらの方に置く?: 左側ですね。

・好きな曲（音楽）は何ですか?: ちょっと考えないとわからない… う～ん、好きな作曲家はモーツァルトですけど。自分が音を出しているので、他の時間はあまり音楽は聞いていないかも…

4.3.3 交流タイム

交流タイムは、スタインウェイ東京のショールームで行われた。飲み物と菓子のテーブル近くに、佐原さんと今川さんが立ち、観客を迎えて話す形になった。直接話をした観客は、音楽のことだけではなく、幅広い話題で盛り上がった。観客によっては、広いショールームにあるスタインウェイのピアノの方に興味を持っ

たようだった。また、一度に数人しか話せないため、遠慮して近づかない客もいた。場所を狭くし、演奏家が動いて観客に話に行くスタイルの方が良かったと感じた。

4.3.4 アンケート結果について

観客30人の全員から回答を回収した（アンケート結果は付録を参照）。知識なしに楽しめたかとの問いには28人が「はい」と回答した。クイズ・解説などの仕掛けは興味深かったかについては、全員の30人が「はい」と回答、具体的な例として、一曲ごとに解説が入ってわかり易かった、時代系の比較やエピソードが良かった、弓の違いが聞けて良かった、クイズや解説を通じて演奏家への親近感がわいたなどが挙げられた。MinCのようなコンサートにまた参加したいかとの問いには30人全員が「はい」と回答、気軽さ、演奏家との距離、解説が良かったが主な理由だった。また、クイズ、質問コーナー、解説で演奏家やクラシックを身近に感じる事ができたとのコメントもあった。これらの解答より、気軽さや、演奏家との距離が縮まったことで、音楽が身近になったことが伺える。

4.3.5 まとめ

第1回目、2回目の結果を踏まえ、自己紹介は短く、演奏家のプライベートについては、質問コーナーで聴いてもらうことにした。また、コンサートにストーリーをもたせるため、バロックから近代まで、クラシックの時代ごとに曲を演奏し説明をしてもらった。演奏家の佐原さんは、昨年より、KMD ミュージックプロジェクトのための情報収集に協力してくれ、今回も実験コンサートを快く引き受けてくれた。仕組みをできるだけ取り込む意欲を見せてくれたものの、経験豊富でスタイルが確立していることもあり、演奏中の写真や飲み物、観客への質問は抵抗があったようである。（図4.14を参照）

また、観客にコメントを聞くことも行われなかった。観客人数が30名と今までで一番多く、1人から意見を聞いても、他の客が関心を持たないのではないかと

	仕組み	実施の有無
会場の雰囲気	先入観対策	○
	会場設定	○
	演奏中の飲み物	×
	演奏中の写真撮影	×
情報	曲の解説	○
	曲の聴き方の提案	○
インタラクション	自己紹介	○
	観客への質問	×
	クイズ	○
	トーク	○
	質問コーナー	○
	グループフォト	○
	交流タイム	○
	フェイスブック	○

図 4.14: コンサートに取り入れられた仕組み Vol 3

の懸念を佐原さんが示したためである。やはり、演奏家サイドも自分のスタイルをすべて変えてコンサートを行うことには不安があったと思われる。

曲の解説は主に演奏前に行われた。クラシックの専門用語は受け入れる客と無関心な客にわかれた。知的興味をそそられるレベルが人によって違うことが確認された。言葉自体に興味を持たない観客がため息をついたり、下を向いたりした。一方で、元の曲よりも後世編曲されたものが有名になったり、作曲家の性格が曲に出る話、曲が売れて作曲家が儲かった話などは、クラシックとは関係なく興味をそそるもので、笑いや頷きの反応が多かった。

選択式のクイズは、全員参加ができるためエンゲージメントが高まりやすい。高いほうの弓がベンツ一台分と聞くと、がぜん興味がわいた様子で、のぞき込んだり熱心に聴き入った。結果を聞くと、大多数が正解だったため、観客同士で盛り上がり、隣同士と話したり、頷きあう姿が確認された。また、演奏家とのやり取りの中で、身を乗り出す、笑う、表情が変わるなどが観察された。質問コーナーでは、演奏会中のクイズやトークに関する更なる質問が出て、今回のコンサートに関する強い興味を確認された。また、演奏家の普段の生活や、男性・女性のハ

ンデなど演奏家が思ってもみなかった素朴な質問が次々に出された。演奏家たちはざっくばらんに返答し、観客にとって「演奏家」というものが身近に感じられるきっかけとなった。

第5章

結 論

5.1. リサーチの成果要約

3回の実験的コンサートの観察を通じ、観客のほとんどが再度参加したい意思を示した通り、彼らの満足度はいずれも高かったと言える。コンサート運営事務局として、時間配分をコントロールできなかったり、アナウンスを忘れたりし、計画通りにできなかった部分もあった。しかし、ライブの様子を記録できたことは有意義であった。観客、演奏家、会場を変え、違う条件の下で3回開催した結果、以下の観察・アンケートのフィードバックが確認できた。

- 場がなごんでいると、演奏家からの問いかけに反応しやすい
- 観客は専門家が想像できないような素朴な質問をし、答えてもらおうと嬉しい
- クイズは選択形式にし、手上げ方式にすることにより全員参加が可能となり、自分が正解かどうかのワクワク感もあり楽しめる
- 自分の感想を人前で述べるのは、間違っているかもしれないとの不安が付きまとうが、間違いというものはないという安心感が一旦形成されると、コメントをするのは楽しい
- クラシック音楽の専門用語については、その場で説明、理解を得るのは初級者には難しい。曲の情景をイメージしたり、色を思い浮かべるといった提案の方が有効である

- 観客が思い浮かべたイメージなどを言語化し会場で共有するのは、他の観客の意見も聞けて面白い。その際、「自分のもったイメージ」に間違いというものはいいという前提が大切である
- 交流会で直接演奏家と話せると嬉しい
- 作曲家の人間らしい一面がわかるこぼれ話は、クラシックに対する親近感を抱かせる
- 楽器の値段のような卑近な話は興味を惹きやすく、楽器に親近感がわく
- 演奏家のパーソナルな話は、失敗談なども含め観客の興味を惹き、親近感を抱かせる。通常の演奏会で、自分のパーソナルな話題を話す機会はあまりないが、質問コーナーという形で自然と話す形を作れる
- 自己紹介は短く切り上げ、質問コーナーで観客に演奏家のプライベートな部分を引き出してもらった方がよい
- 自分が発言したり、手を上げることでコンサートに参加した気になる
- 観客はクラシックに関わる問いかけには一生懸命答えようとし、コミュニケーションが生まれる
- 質問コーナーでは、他の観客の質問に触発され、興味が湧き次々と質問が発生する
- 質問コーナーは、時間を区切って行わないと区切りがつかず、ダレてしまう
- 交流会は、演奏家が観客に対してアプローチをした方が、より多くの観客と交わることができる

双方向コミュニケーションにより、観客は演奏家を身近に感じる事ができた。高い舞台の上で演奏している偉い人ではなく、自分たちと同じレベルにいて、いろいろ教えてもらったり話をしたりできたからだ。また、演奏家の提案や解説に

より、コンサートを楽しめることが確認できた。更に、クイズや質問コーナーでは、観客がコンサートに参加して楽しむ姿が確認された。一方で、観客に対する質問は、内容によっては興味を喚起できないこと、また自己紹介は短くし、演奏家の素顔については質問コーナーでのやり取りが有効であることがわかった。

このようなコンサートを創るためには、観客、演奏家双方が先入観を捨て、一緒にコンサートを創り上げていくことの重要性を強く感じた。観客がクラシックコンサートに対して持っているイメージというのは、「自分が楽しむため」と共に「演奏家が演奏を披露する場」との回答が多く（アンケート結果は付録を参照）、観客自信にもコンサートは拝聴するものという先入観がある。そのため、双方向コミュニケーションに積極的に参加するよう促しても、なかなか行動に移せない観客もいた。また、演奏家も自分の演奏スタイルを変更し、MinC コンサートの仕組みを100%取り入れることには抵抗や不安が認められた。

興味深いことに、観客募集の段階で、「双方向のコミュニケーション」とは、その場で何か話さなければいけないのかという質問が寄せられた。来場者も、「参加型のコンサート、双方向のコミュニケーションとはいったい何???」と疑問符を頭に抱いていた人々も多かったと思う。実際体験してみて、質問できて意外と面白かった、今までにない形式で、演奏家やクラシックが身近に感じたという声をきくことができた。

今回の実験コンサートだけで、観客のクラシックコンサートに対する見方が完全に変わったとは言い難い。しかし、コンサートに自ら参加することで、よりコンサートを楽しめたという体験は、観客にとって今までにないことで、また参加してみたいという観客が多かったことは収穫といえる。また、演奏家にとっても、今までのコンサート形式ではなかった、観客からの直接的な反応をつかめ、これからどのようにコンサートと向き合っていくかのヒントになったのではないと思う。

5.2. 展望・課題

今回の3回の実験を通じ、双方向コミュニケーションが、コンサートに参加する楽しさを生み出す効果は確認できたものの、この形式をどのようにスケールしていくかには言及できなかった。コンサートの規模と演奏家の双方向コミュニケーションを起こすための意思、力量が関わってくる部分である。

今回は観客数が16人から30人までの規模で行われたが、これがより大きな会場で可能なのか、あるいは小規模のコンサートを数多く開催していく可能性を追求していくべきかは今後の課題として残された。また、演奏家のトークや、観客を巻き込むという意味や力量も課題である。演奏者側からのコメントでは、初めての経験だったが、観客と直接話ができただことは良かったと述べられている。しかし、彼らにとって、演奏だけではなくトークの仕方を工夫するのは難しかったとの声も上がっている。実験コンサートでは、前もって仕組みを説明し演奏家に内容を考えてもらったり、スライドを使ってサポートをした。また、研究チームのメンバーが合いの手を入れたりもした。このトークの部分で、すべてを演奏家にゆだねるのか、あるいは別途専門のMCを参加させるか、あるいは観客の実勢に期待するのかなど、更に議論の余地がある。

最後に、当初はコンサートを含む包括的なサービスデザインを目指した研究であったが、コンサートの仕組みにフォーカスし、他の部分については十分な議論がなされなかった。特に、コンサート後の繋がりについては、グループフォトやフェイスブックのパブリックページでのフォローを提示したが、効果の確認には至らなかった。観客をコンサートに導くためのマーケティング、コンサート後の繋がりをどのように継続させていけるかの部分については今後も研究が必要である。

参 考 文 献

- [1] 渡辺裕. 聴衆の誕生 ポスト・モダン時代の音楽文化j 新装増補j, 1996.
- [2] Edward W Said. *Musical elaborations*. Columbia University Press, 1991.
- [3] 岡田暁生. 音楽の聴き方, 2009.
- [4] 川又啓子 et al. 日本のコンテンツ産業の現状. 京都マネジメント・レビュー, 7:107–132, 2005.
- [5] 有田洋子. 美術作品の美的理念を比較抽出させる鑑賞教育方法: 菱田春草「黒き猫」「柿に猫」を教材例として. 美術教育学: 美術科教育学会誌, 30:53–64, 2009.
- [6] Judith S Koroscik, Georgianna Short, Carol Stavropoulos, and Sylvie Fortin. Frameworks for understanding art: The function of comparative art contexts and verbal cues. *Studies in Art Education*, 33(3):154–164, 1992.
- [7] Abigail C Housen. Aesthetic thought, critical thinking and transfer. *Arts and Learning Research*, 18(1):2001–2002, 2002.
- [8] 和田充夫 et al. 超高関与消費者行動とその対応戦略: Bmw から宝塚歌劇まで. 商学論究, 60(3):69–82, 2013.
- [9] Elizabeth C Hirschman and Morris B Holbrook. Hedonic consumption: emerging concepts, methods and propositions. *The Journal of Marketing*, pages 92–101, 1982.

- [10] Kathleen T Lacher and Richard Mizerski. An exploratory study of the responses and relationships involved in the evaluation of, and in the intention to purchase new rock music. *Journal of Consumer Research*, 21(2):366–380, 1994.
- [11] Kathryn Herr and Gary L Anderson. *The action research dissertation: A guide for students and faculty*. Sage publications, 2014.

謝辞

本論文の指導教員、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の奥出直人教授には、デザイン思考を始め哲学、マーケティング、ブランディングについて学ぶ機会を与えていただき、指導していただいたことを心から感謝いたします。また、論文執筆にあたり、適切な指摘をいただいた慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の大川恵子教授、励ましをいただいた慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の石戸奈々子教授に感謝いたします。

調査にあたり、コンサート事情についてご教示いただいた、白寿ホール支配人の原浩之様、王子ホール ディレクターの船橋新吾様に感謝いたします。また、3回の実験コンサート開催にあたり、数々の方々のご理解、ご協力をいただきました。演奏家の紫竹友梨氏（チェロ）、細野愛美氏（声楽）、宮尾夕華氏（ピアノ）、相馬優希氏（ピアノ）、菊岡真智氏（フルート）、佐原敦子氏（ヴァイオリン）、今川恵美子氏（ピアノ）に感謝いたします。また、会場を提供してくださったスタジオ・グリット名古屋、スタインウェイ東京の皆様にも感謝いたします。そして、観客としてチケットを買い、コンサートに足を運んでくださった多くの方々にも感謝の意を表します。

本研究プロジェクトの活動をガイドしてくださった慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の佐藤千尋特任助教、一緒に議論を重ねたプロジェクトチームの酒井さん、伊藤さん、アイディエーション、スキットなどで協力いただいたOIKOS 研究室の皆さんにも感謝いたします。

最後に、会社を退職して大学院へ進学するという選択をあたたく見守り、応援してくれた家族に心から感謝いたします。

付 録

A. ステークホルダーへの提案書

提案に使ったスライド

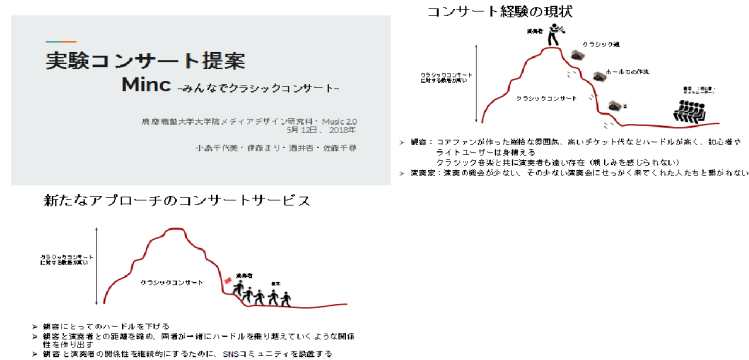


図 A.1: ステークホルダーへの提案書 1 / 3



図 A.2: ステークホルダーへの提案書 2 / 3



図 A.3: ステークホルダーへの提案書 3 / 3

B. アンケート結果

<アンケート結果> Minコンサート Vol1

回収枚数 14/16

回答者プロフィール

性別	年代	職業	過去12か月にクラシックコンサートへ行った回数
男性 7人	20代 0人	学生 0人	0回 5人
女性 7人	30代 1人	会社員 7人	1-2回 4人
	40代 1人	個人事業主 3人	3-5回 3人
	50代 4人	主婦 4人	6回以上 2人
	60以上 8人	退職者 0人	

1. 知識なしに楽しめたか？	3-1 好きな曲についてもっと知りたいか？	4. 聴いた後、好きな曲をダウンロードしたいか？
はい 14人	はい 12人	はい 13人
いいえ 0人	いいえ 0人	いいえ 0人
	無回答 2人	無回答 1人
2. 好きな曲 (複数回答可)	3-2 何を知りたい？ (複数回答可)	
エルガー 9人	作曲家 5人	
イェスタデイ 3人	曲の背景 11人	
メンデルスゾーン 5人	楽器 2人	
ビゼー 9人	演奏家 1人	
マスカーニ 5人	その他 0人	
パッパ 7人		
アンコール 6人		

図 B.1: アンケート結果 Vol 1 1 / 2

5. クイズ・解説は興味あったか？

はい 14人
 いいえ 0人

具体例

・チェロの知識が全くなかったが、楽しみ方、イメージの方法
 ・自由に感じればよく正解がないということで、ハードルが下がった
 ・音の色をイメージしていたことが演奏家さんもやっていて、わかって嬉しかった
 ・質問にもきちんと答えていた点
 ・チェロのエンドピンのこととか面白かった
 ・知識がなくても楽器、曲の意味や内容を知れて良かった
 ・チェロの知識が増えたのは良かった
 ・そんなに深くなくても曲の背景が知りたい
 ・もう少し時間をかけてもよかったかもしれません
 ・チェロのことがよく分かった
 ・クラシックの知識はなかったが、曲の前後の解説でとても身近に感じられた

6. また参加したいか？

はい 13人
 いいえ 1人
 (演奏会後は余韻に浸っていたいから)

理由

・気軽に参加できるコンサートで身構えず、リラックスして楽しめた
 ・癒される
 ・親しみ深く楽しめた
 ・近くで演奏家の話が聞けるのは貴重な体験です
 ・音色が素敵だった。ゆったりとできた
 ・聴くだけでなく、説明があると嬉しいから
 ・間近で聴けてとても感動しました
 ・近い距離で聴けるのが良い

図 B.2: アンケート結果 Vol 1 2 / 2

<アンケート結果> Minコンサート Vol2

回収枚数 17/21

被験者プロフィール

性別	年代	職業	過去12か月にクラシックコンサートへ行った回数
男性 7人	20代 11人	学生 9人	0回 10人
女性 10人	30代 4人	会社員 7人	1-2回 4人
	40代 1人	個人事業主 1人	3-5回 2人
	50代 1人	フリーランス 0人	6回以上 1人
	60以上 0人	主婦 0人	
		退職者 0人	

1. 知識なしに楽しめたか？

はい 17人

いいえ 0人

具体例

・演奏の前倒し曲についての説明やクイズがあったこと

・始めに自己紹介をして場を和ませたこと

・聴きやすい曲が選曲されていた

・自己紹介で垣根を低くしたところ

・クイズや曲の背景を説明してくれるところが良かったです

・観客と演奏家が近くインタラクティブしていた。インタラクシ

ョンのおかげで演奏家のことが少しわかった

・背景の説明

・双方向的、セットアップがFormaでレイアウトがアレンジを難しくした。

・パーソナル、一人一人のIdentityがわかったのが良い

・Q&Aコーナー

・演奏前に曲の背景などモニター付きで解説があったこと

・Q&A

・聴衆とのインタラクション

・物語を先に説明してくれたから思い出しながら楽しむことができた。クラシックの知識のない人にわかり易い説明を工夫していたと感じました

・先に曲の背景をきけたので、イメージしながら聴けた

・曲の背景の説明など

図 B.3: アンケート結果 Vol 2 1 / 3

2. 好きな曲(複数回答可)

竹とんぼ 7人

糸を紡ぐグレートヘン 4人

献呈 5人

しまめる花 11人

讃えよ調べよ歌いつれよ 6人

3. 好きな曲をもっと知りたいか

はい 11人

いいえ 6人

4. 知りたいと答えた方・何を知りたいか

(複数回答可)

作曲家 2人

曲の背景 9人

楽器 2人

演奏家 1人

5. クイズや解説は興味深かったか

はい 13人

いいえ 4人

具体的に良い点、悪い点

・クイズが3択だったので答えやすかった

・曲の背景をきけたこと。曲を聴く前、聞いた後、両方の

パターンで背景を聞いてみたかった

・クイズの内容は良かった。血液型やペットの話は演奏にあまり関係ない

・手を上げさせる時間が少し短かった

・曲を聴く前に、その曲に興味を持てる。作曲家たちの名前が当たり前のように出るが、知識がないので作曲家自体の説明が欲しい

・クイズはフレンドリーで聴衆をエンゲージした

・そもそも知らないもので、例えば時代背景についても知りたいところ

・すごく近かったこと。行き先の生々しさやテンポの合わせ方などテレビじゃ感じるのできないところを感じることができた

・楽器や、その方のことをもっと知りたかった。ピアノの弾いている姿を見たかったので、向きを少し変えるといいかもかもしれないです。

・音楽について知識がなかったので良かったです。

・リハズオンで良かった。学べた。Spontaneous な態度が良かった。

・演奏者による曲の説明

・歌詞をモニターに映しても良いと思いました

・スライドが少し見にくかったです

・クイズはちょっと急な感じがした

・良かった。参加したくなった

・難しすぎない質問(専門的な言葉じゃない)で興味を持って参加できた。シューベルトがどんな人なのかや、聴いたことのあるメロディ

などもっと身近に感じられるうんちくみたいなのがあると、よりクイズに入り込めたかも

図 B.4: アンケート結果 Vol 2 2 / 3

6. また参加したいか

はい 16人
いいえ 1人

理由

- ・もっと他の曲も聴いてみたいので
- ・クラシック音楽自体聞く機会があまりないため
- ・双方間で交流がある
- ・通常のコンサートと異なり一方通行ではなかったから
- ・質問できるのが楽しい。双方向性が良い
- ・私にとって新しいタイプの今まで聴いたことのない音楽を楽しく聴けて良かった
- ・やはりまだ窮屈な感じがぬぐえない
- ・楽しかったです
- ・演奏家の年代が近く、お互いが成長している様子が肌で感じられるから
- ・演奏家が好き。演奏も好きだけど、あの雰囲気、リハーサルみたいなのがいっぱい。ミスっても人間味がある。クイズ説明、性格が良い
- ・気軽にクラシックが楽しめた
- ・演奏者が演奏曲について話すという形態が良いと思う

・参加するのが簡単

- ・気軽に参加できるから
- ・背景をすることで聴き方がぐっと変わった。クラシックはカナリの初心者なので、もっとユーモアがあると楽しかった
- ・リフォーマーの方がもう少しプロフェッショナルな感じだと良い

7. クラシック音楽に対するイメージ(複数回答可)

演奏家の披露の場 11人
自分が楽しむ場 10人
聴く前に準備が必要 5人
憧れる 5人
ネガティブ 6人
その他 1人

図 B.5: アンケート結果 Vol 2 3 / 3

<アンケート結果> Minコンサート Vol3

有効枚数 30/30

被験者プロフィール

性別	世代	職業	過去12か月にクラシックコンサートへ行った回数
男性 11人	20代 8人	学生 4人	0回 13人
女性 19人	30代 0人	会社員 17人	1-2回 11人
	40代 1人	個人事業主 2人	3-5回 3人
	50代 17人	フリーランス 2人	6回以上 3人
	60以上 4人	主婦 1人	
		退職者 4人	

2. 好きな曲(複数回答可)

G線上のアリア 12人
ベートーヴェン ソナタ 10人
ハンガリー舞曲 16人
ビュッシー: 西風のみたもの 9人
イザイ: 無伴奏ヴァイオリンソナタ 7人
シェーンベルク: ファンタジー官頭 1人
フランク ソナタ 16人

4. 知りたいと答えた方・何を知りたいか(複数回答可)

作曲家 9人
曲の背景 21人
楽器 3人
演奏家 4人

3. 好きな曲をもっと知りたいか

はい 24人
いいえ 5人
無回答 1人

図 B.6: アンケート結果 Vol 3 1 / 3

5. クイズや解説は興味深かったか

はい 30人
いいえ 0人

具体的に良い点、悪い点

・単なる曲の解説だけでなく、演奏家視点から話を聞くことができた
・同じ曲で、違う弓(音)を試してくれたこと。新鮮でした

・良:クイズで音を聴き分けるのは楽しかった。悪:もう少し背景を知りたい
・ヴァイオリンの弓の値段、ベートーベンの性格
・お金の負担など、実情を知れて興味深かった。が同時に芸術家、表現者としての心をもっと知れる話が聞ければ良かった
・一曲ごとに解説が入っているのが良かった。わかり易かった
・格付け(弓の)面白かったです
・話し方についてスキルアップするより良いと思います
・弓の違い、質問タイムが面白かった
・弓の価格
・音の違いを知ることができた

・身近に感じることができた
・時代系の比較、エピソードを交えた曲解説は良いと思います
・楽しめた
・弓の違いがわかり易かった
・トークプロにMCさせると良いかも
・ヴァイオリンの弓の格付けチェック
・クイズ、解説を通じて演奏家への親近感がわいた
・作曲家についての紹介や小話が良かったです。悪かった点は特にありませんが、強いて言うならもっと裏話等の時間があれば良かったです
・音の聴き比べができたところ
・ちょっと長かった気がします。演奏を聴きに来るだけの人も中にはいると思うので。何間かこじまって、残りませせブションで回答するとか(注:音大を卒業したばかりのサクソ奏者)
・質問があり楽しかったです
・クラシックが日常から離れたものだ感じていたが、親近感がわきました。もっとクイズがあると良かったです。

図 B.7: アンケート結果 Vol 3 2 / 3

6. また参加したいか

はい 30人
いいえ 0人

理由

・また機会があれば
・とてもリラックスして、気軽に聊けた点。演奏家との距離が近かった点
・すぐ近くで聊ける、演奏家の思いが聞ける、他の客の考え(感想)を知ることができる
・曲の背景がわかる。ラインナップも工夫されていると思うので楽しみ
・気軽に参加できた
・時間が短く、手軽な値段。演奏家との距離が近い
・音楽への理解が深まる
・間近で聊けて迫力がある
・課題は「身近で」をどう作っていかだと思えます。コンサートでそれを作っているのも良い、他のチャネル(タッチポイント)をどう作っていか考えていきたいです
・事前に曲がわかれば
・忙しい日常生活の中でリセットできる一時間が嬉しい
・気軽に来れる
・親しみやすい、気軽に参加
・いろいろ解説をしてくださることでもっと知りたいと思いました

・いろいろな知識を得られた
・双方でコミュニケーションを取れる
・時間とコストが気軽に
・楽しかったです。演奏家の個性も強調されたように思う
・短時間、面白い
・演奏家との距離が良く、お話が面白かったです
・堅苦しいイメージなく楽しめたので
・双方向のやりとりができ、音楽をより身近に感じることができた
・他の演奏者がどんな司会をするのか気になる
(注:音大を卒業したばかりのサクソ奏者)
・演奏家との交流は面白い企画だと思います
・どう感じればよいのか、どう楽しめばよいのかわかるから

7. クラシック音楽に対するイメージ(複数回答可)

演奏家の披露の場	11人
自分が楽しむ場	18人
聴く前に準備が必要	3人
憶れる	9人
ネガティブ	2人

図 B.8: アンケート結果 Vol 3 3 / 3